

Ⅱ. 生徒の部



叶わなかった夢

平成6年度卒業生 惣 輪 理 恵 (北 区)

1月17日の“兵庫県南部地震”でたくさんの人が亡くなり、たくさんの家が倒壊し、たくさんの大切なものが奪われました。幸い、私の家は食器棚やタンス等が倒れた程度で家族も無事でした。祖父や祖母が淡路に住んでいますが、家は全壊したもののみんな無事で、本当に信じられないくらいです。あの日、私の家では地震から約5時間後の10時30分過ぎに電気がつきました。その時テレビで聞いた被害は“亡くなった方29人、負傷者多数”といったものでした。その日からしばらくは、日に日に大きくなっていく被害の様子をただ呆然として見ているばかりでした。あれから1か月。水もガスもようやく出るようになってほとんど元の生活に戻った今、私はこの地震で大きな大切なものを奪われた事に気がついていました。それはこの神戸女子商業に入学した時から3年間ずっと思っていた“3種目1級合格”という夢です。卒業式の時に全商協会3種目1級合格表彰を受賞する事を目標に3年間がんばってきたつもりです。1月22日の簿記検定、2月5日の商業経済検定に向けてがんばって勉強していました。「絶対3種目1級取るぞ!」という気持ちで…。この夢はあきらめるしかないんやって思った時は、本当に悔しくて悔しくて泣いた日もありました。私の3年間をかけた夢だったから…。しかし現実には、家も家族も失い避難されている方がたくさんいます。そんな人に見れば私の失ったものなんてほんの小さな夢にしかすぎないのです。この事は早く忘れるようにして、かなえられなかった夢の分までがんばって立派な社会人になれるように努力したいと思います。

“震災に負けないように力強く生きよう!!”





大地震に遭遇して

平成6年度卒業生 神野 ゆ み (兵庫区)

1月17日、誰もがこの日にまさか震度7という大地震が、地震が来ないと思われていた神戸に来るとは思っていませんでした。

私は、地震が起きる前はぐっすり眠っていました。寝ていると急に下からドドドと3回ぐらいつきあげるようなたて揺れがきて、私はそれでびっくりして目が覚めました。それから、布団から出ようとしたら、体の下半身の部分にたんすがのっけていて、布団から出られませんでした。私のとなりで寝ている妹もたんすの下じきになっていました。私は、「お父さん、お母さん助けて!」と、何回も布団を顔までかぶって叫んでいました。両親が私と妹の名前を呼ぶ声が聞こえて、私は安心しました。妹は、両親の呼びかけに「だいじょうぶ」という声が聞こえたので、私は家族全員大丈夫だと思い、安心しました。

そして、両親が私と妹の体の上ののっているたんすをのけて助けてくれました。私は、一体何が起こったのか、助けを求めるのと、家から逃げ出すのが必死で分かりませんでした。やっとの事で家から家族全員出たと、ほっとしていたら、母が、「おばあちゃん!」と叫びました。二階に住んでいるおばあちゃんを父と母が助けに行きました。私と妹は、パジャマのままでくつもはかないではだして家から飛び出したので、寒くてふるえながら、おばあちゃんの身の安全を祈っていました。少しすると父がおばあちゃんをおんぶしてななめになった階段から下りてきました。私はとてもほっとして、おばあちゃんの手を取りました。近所の人たちが私たちに靴やセーターを貸してくれました。でもまだ近所の人で家から出られない人もいて、父が助けに行きました。近所の人たち同士で「大丈夫ですか」と声をかけ合いました。それから、家の近くが火事になって、火の粉が飛んできたので近くの公園へ避難しに行きました。だんだん夜が開けてきたので壊れてしまった家や、かたむいている家が見えて本当にすごい地震だった事を思い知らされました。

私の家も全壊して、住めなくなった今、公園の自衛隊のテントで避難生活を送っています。初めの十日間ぐらいは電気がまだ付いていなくて、懐中電灯の明かりで生活していたけれど今は、電気も付いて大分生活しやすくなりました。まだテントの方が体育館で避難生活を送っている人よりプライベートも守れて、ましだと思ってがんばっています。

この大地震で自分がどれほどぜいたくな生活をしてきたのか思い知らされました。それに、近所の人達や親せきやいろいろな人達にお世話になって、私の周りの人はみんないい人達ばかりで、私

は恵まれているなあと思いました。近所でも亡くなった人たちがたくさんいますが、私はその人達
の分まで精一杯がんばって生きていこうと思います。



阪神大震災を体験して

平成6年度卒業生 岩下涼子(垂水区)

私は地震の恐ろしい力を知りました。今まで他人事のようにテレビなどで見ていたことが、実際に自分自身に降り懸かるなんて思いもしませんでした。

1月17日の朝、私はものすごい音と信じられない大きな揺れで、目が覚めました。一瞬、何事が起こったのかと判断ができない状態で激しい揺れを感じたのでした。まるで、洗濯機の中でゴチャ混ぜにされた気分でした。部屋の中に置いてある物はほとんど倒れて、私はもしかして家がつぶれてしまうかもとか、死んでしまうかもとか、いろんなことが頭の中をよぎりました。

しかし、地震は私が思った以上に恐ろしい結果を残していたのです。ニュースで次々と信じられない映像が放送されて、私はショックでたまりませんでした。一日一日、死者が増え、五千人というものすごい人数に呆然としました。いくら自然災害だといってもひどすぎると私は思います。亡くなった方々がどんなに苦しんだかと思えば胸が痛くなり、悲しくてしかたがありません。この地震は早朝に襲ってきたから死者がこの人数ですんだけれど、あと二、三時間遅ければどんなことになっていたかと思えば恐くてたまりません。

普段の生活もアッというまに変わって、水やガスも使用することができなくなって、今まで当たり前になっていた生活が懐かしく感じました。毎日、給水車から水をもらって生活するのは大変でした。経験しないとわからないなあと実感しました。私は、ぜいたくな生活をしていたと反省し、これからは何気無い事にも注意をしていきたいと思います。

私は、ある意味では貴重な体験だったと思っています。なぜかという人々が励まし合い協力して生活するなんて今までの生活だったらできていなかったと思います。そして、水やガスの大切さがわかりいろんな事を知ったと思います。でも多くの尊い命が失われたことは残念です。

もう一つ残念なことは残り少ない高校生活です。最後の検定試験や行事が出来ないのは寂しく思いましたが、命があってこそ思えることなのでこれからの毎日を頑張りたいです。

阪神大震災という名がついて忘れられない体験をしましたが、私より、もっとこまった人達がい

るのだから、あまえをなくして元気に過ごしていきたいです。



増え続けた死者の数

3年生 種 継 由 美 (芦屋市)

あの大地震が起こってすでに1か月が過ぎようとしています。私はこの1か月間、一日一日が過ぎていくことが嫌で仕方ありませんでした。暗い夜が明ける度にテレビに流れる死者の数が、何百人という単位で増え続けていたからです。テレビの画面を見ながら「もう、この数字で止まって！」と願わずにはいられませんでした。でもその願いも空しく、死者はとうとう五千五百人にも上ってしまいました。幸い私は、家も家族も親戚も失うことはありませんでした。しかし、中学時代の友人が二人、家屋の下敷きになって生き埋めになり亡くなってしまいました。

今回の地震には、自然の猛威を見せつけられたような気がします。私の家の近所はほとんど全壊していて、残って建っている家の方が少ないという状態でした。被害は近所だけでもかなりひどいと思っていましたが、テレビで見ていた長田区周辺に、地震後初めて行って実際の被害の様子を目の前にした時、息を飲んだと同時に時が止まったようなショックを受け、目には涙がにじみました。まるでぽっかり穴があいたように胸が痛みました。

突然に起こったほんの数秒間の地震で、こんなにもたくさんの物が奪われてしまったなんて、とても悔しい思いで一杯です。しかし残された私達は、一日も早い街の復興をめざさなければなりません。そんな私達に、日本全国からの温かい支援や、多くのボランティアの方々が力を貸して下さり、本当にありがたくて涙が出る思いです。こんな時に皮肉な事だけど、“まだまだ人間もすてたもんじゃない”と感じました。

街が完全に元通りになるには、何年かかるかわかりません。とりあえず先が見えているものといえば、水道やガスでしょう。とはいえ復旧作業をして下さっている方々も、不眠不休のため過労で倒れている人もいます。私の父もその一人です。病院で父の前に運ばれてきた二十代の男性は、過労のため心筋梗塞で亡くなられたそうです。私はたとえ街の復興のためであっても、これ以上尊い命を失ってはならないと思います。

そして、まだ余震が続いているので、あの恐ろしい瞬間が甦って精神的に苦しんでいる人も大勢います。私自身も本当は、顔がこわ張って、少し体が震えるほど怖いけれど、そんな人達を少しで

も助けてあげられたらと思っています。

今回の地震は、本当に学ぶことがとても多くありました。



阪神大震災を体験して 知った人の心の温かさ

3年生 坂田 真理 (東灘区)

思いもよらない地震で、色々な事を学んだような気がする。

まず、自然の恐ろしさ、私達は地震に対してあまりにも無関心だったように思われる。私が地震後初めて外に出て見た光景は、昨日とは全く別の世界で、近くの阪神電車も横倒しになり、遮断機も使えない状態だった。その時、私はまだ事の重大さに気づいていなかった。中学時代の友人と、「今日は学校に行かれないな」と話していたぐらいで、まさか街がこれほどひどく、無残な姿に変わっているとは、思いもよらなかった。

その後二、三日だったが、電気もガスも無い今までとはかけ離れた体育館での避難生活。これからどうなるのかと、不安な気持ちでいっぱいだった。そして、余震の度に皆が飛び起きた。

震災から免れた人達は、戦争で焼けただれた街からここまで復興できたのだから頑張れとか、無責任な事を言うけれど、現在より不便だった昔のほうが、復興の速さは比べものにならなかったと思う。なぜなら、便利で何不自由ない生活は、裏を返すととても脆く壊れ易いからだ。それに加えて行政の対応のまずさ、遅さ、挙げ句の果てには「言い訳」まで飛び出す始末だった。「こんな時にしっかりしないでどうするのか」と、首を傾げたくなる。もっと情報が細かく行き届いた国にしなければ、またこのような災害が起こっても、同じ事の繰り返しである。「もう少し対応が早ければ、亡くなる人はもっと少なかった」と言う声は聞こえないようにしてもらいたい。大きな被害の上に行政の対応が悪いのだから、復興が思うようにはかどらないのだと思うのは私だけだろうか。

また、この地震で、人間の本来の優しさや汚い心を見たような気がした。震災前は知らない者同士でも、瓦礫の中から人を助け出したり、すれ違いざまに声を掛け合い、話し合ったりする姿があった。当たり前だが、私は戦争を知らない。だが、このような様子を見ると、「戦後の人々もこんなふうに参加していたんだろうなあ」と人情の温かさを知ることができた。

しかし反対に、この震災に便乗して不当に品物を売ったり、タクシーの運賃を「震災地料金」という名目で取ったり、崩れかかっている家に侵入して家財道具を盗んだり、無人になった店内の

商品を盗むなど、助け合っている人々と同じ人間とはとても思えない。

これから学校も始まり、少しずつ元の生活に戻っていくと思われるが、恐らく一年後もまだ地震の大きな爪跡は残っているだろう。新しい未来に向かって私達は、この貴重な地震の体験を大切に、自然の恐ろしさや生活基盤の脆さ、そして、一番大切な人の心の温かさを、決して忘れてはならない。

私が大人になって振り返った時、良い体験をしたと思えるように、今を今まで以上に大切にしていこうと思う。今があるからこそ言える事だと思う。

私が好きな言葉に、
「今この瞬間〔とき〕

この日を
いつ迄も大切に
忘れずにいたい」

という詩があるが、これから復興しようとする神戸の人にふさわしい言葉だと思う。



親友の死

3年生 根木智子(灘区)

私は地震が来る少し前に目が覚めていた。起きるにはまだ早いと思い、また寝直そうと布団をかぶり、眠ろうとしたその時小さな地震が来た。私が、「あっ地震や。明日みんなに言わな」と思っていると、すぐにあの大きな地震が来た。私はあまりにも恐ろしくて大声で叫んだ。気がつくとタンスが倒れていた。寝ている私の上に色々な物が落ちてきていて、身動きできなかった。

しばらくして母が来て物をどけてくれ、やっと動けるようになった。私は少しの間、震えが止まらなかった。部屋の中を見渡すと何もかもがめちゃくちゃになっていた。私が寝ていた頭のすぐそばに、テレビが落ちてきてころがっていた。幸いにも大きなくまの縫いぐるみにあたって、私には当たらなかったのだ。

停電のため辺りは真っ暗だった。夜明けまでにはまだ時間があった。そして父が懐中電灯で照らしてくれたのでほっとした。家族みんなが一本ずつ懐中電灯を持って外に出た。近くの学校のグラウンドに避難すると、人が大勢集まっていた。夜が明けるまで皆はじっと待っていた。グラウンドの土

は冷たく、座ると体中が冷えて寒かった。水も食べ物も何もなかった。

東の空がしらじらと明るくなってきた頃、自宅の南側の少し離れた所から火が出た。すると今度は、2号線を挟んだ北側からも火が出た。ほかにもいろんな所から火が出はじめた。火は燃え続け、燃えるだけ燃えてすべての物を焼き尽くした。消防車は来なかった。「消防署は何してるんやろう」と思った。

夜がすっかり明けて明るくなってから、私達は自宅に戻って片付けを始めた。すると父の友人の奥さんと娘さんがやって来た。その人達は私の親友の家の隣に住んでいた。その奥さんは私に、「ひろみちゃん下敷きになって死んでもたんよ。みんなで出してあげてんけどあかんかったみたいやわ」と言ってきた。ひとみちゃんは数少ない私の親友の一人だった。私は何が何だかわけがわからなかった。そんな信じられなかった。涙も出なかった。私は自分の目で事実を見るまでは信じないつもりだった。次の日親友の家を訪ねると、彼女のお父さんがいた。家はめちゃくちゃで一階が潰れてなくなっていた。おじさんと目が合うと、おじさんは、「根木、大丈夫やったか」と言ってくれた。そのあと、おじさんは17日のことを話してくれた。話を聞いていると涙が出てきた。「本当に死んでもたんやな」と思った。

おじさんは、「ひとみは今、王子の動物園ホールにおるわ」と教えてくれた。その翌日、歩いて動物園ホールまで行った。でも、ひとみはもうそこにはいなかった。結局、ひとみには会うことはできなかった。親友に何もしてあげられなかった自分は、無力だと思うと悔しかった。本当にひとみは死んだんだろうか。遠くに行ってるだけで、またひょっこり「根木、元気しotta?」って現れて来るのちがうかな。どっかで元気にしてるんやできっと。もうこの世の中におらへんなんか信じられへん。

この震災で私は、かすり傷ひとつしなかった。でも親友という大切にしていたものをなくしてしまった。私が怪我をする事で親友が助かっていたんだったら、骨の一本や二本折れてもよかったのに。パン屋のおばさんも亡くなった。なくしても探したら見つかるものやったらよかったのに。見つけられへんものばかりが亡くなった。みんな戻ってそうや、戻ってきたらええのに。何処にいったんやろ。悲しみだけが残った。





私の大好きな神戸、早く復興を

3年生 藤井佳奈(中央区)

「ドドーン！」という今まで聞いたことのない、まるで雷が落ちたかのような音で目が覚めた。するとすぐに、家が激しく揺れ始めた。半分寝ぼけていたので、何が起きているのかははっきり分からなかったが、とっさに布団の中にもぐりこんだ。揺れがおさまると、母が姉と私を必死で呼んでいた。「大変や、すぐに家から出なあかん」と母が叫んだので、これはただ事ではないと思った。何も持たず、パジャマのまま部屋から出ようとすると、箆箆やテレビなどあらゆる家具が倒れていた。やっと階段まで出たけれど、階段の一部が壊れていたので、すべっておりしか方法がなかった。

私達は、這うようにして必死で近くの広場まで逃げた。家の中はすごい埃がたっていた。逃げている間は、寒さも、怪我をしている事も感じなかった。ただ地震のショックと恐怖でぶるぶる震えていた。父は、「家族が無事やったら、もう何もいらん。無事でよかった。無事でよかった。」と、繰り返し言った。私は、ただ泣くことしか出来なかった。

夜が明けて明るくなってから、ふと自分の足元を見ると足に怪我をしていて血が流れていた。私だけでなく、父も、母も、姉も、みんな同じだった。しかし、あまりのショックで痛みにも気が付かなかった。

落ち着いてから、自宅を見に行くと、あまりの変わり果てた姿に啞然とした。一瞬にして神戸の街が変わってしまった。今まで何気なく通っていた道、ショッピングを楽しんだ三ノ宮、私が知っている町並みが、予想だにしない、夢にも思わなかった悲惨な姿になった。まさか。夢なら早く覚めてほしい。こんな身近な所で、こんなにも大きな地震が起きるなんて。

だが、神戸の街はがんばっている。必死で立ち直ろうとがんばっている。神戸が元のような、華やかなショッピング街に戻りネオンが輝く日は、それほど遠くはないだろう。いや、一日も早くそうなってほしい。

阪神大震災で、怖い思いや辛い思い、不安な思いをしたが、貴重な体験だったと思う。

私は、神戸が大好きだ。だから一日も早く復興してほしい。



歴史に残る地震を体験して

3年生 松本 絵子 (兵庫区)

1月17日、突然の大地震に私は驚いて身動きも取れず、17年間生きてきた中で一番の恐怖に襲われました。今落ち着いてみると、私を含めて大切な人達が無事で良かったと改めて思われます。五千人以上の方が亡くなっている中、身近な人がその中に入っていなかったのは、本当に何よりでした。

テレビではずっと、瓦礫になってしまった家屋や、焼け野原になってしまった殺風景な景色が映し出されています。行方不明になっている家族を、涙を流しながら生存していることを信じて捜し続けている人や、肉親の死を目の当たりにして泣き崩れている人々等、とても辛い光景でした。たった20秒ほどの出来事で街は崩壊し、これほど多くの人の命まで奪ってしまうとは、地震は本当に何もかも変えてしまう恐ろしいものだと、つくづく感じました。

私の家族は怪我もなく、家も壊れませんでした。毎日温かいご飯を食べることができてとても幸せです。地震の後、多くの友人から電話がありました。みんな私を心配してくれてとても嬉しく思いました。中には、「水出る？出なかったら持って行ってあげるよ」とか、「食料が確保できなかったら分けてあげるよ」など、同じように災害に遭ったのに、とても優しい心遣いをしてくれて、感謝の気持ちで一杯でした。

壊れた街の中ではボランティアとして働いている方も大勢おられます。無料で温かい食べ物を配ったり、倒れた家の片付けを手伝うなど、知らない者同士でも人が人を助け、お互いに支え合っているのです。

私はこの歴史に残る「阪神大震災」を体験して、様々な事にショックを受けましたが、逆に多くの人の優しさを感じる事ができました。まだ避難所で生活している大勢の方々も、是非頑張ってくださいと思います。今の私には応援する事しかできませんが、何か少しでも役に立つ事があれば、手助けしたいと思っています。

千年に一度あるか無いかの地震を通して思った事や、感じた事は、将来自分の子供に聞かせたいと考えています。人の命の大切さを痛感したこの大きな出来事は、一生忘れないで胸の奥にしまっておこうと思います。



地震を体験して初めて知った幸せ

3年生 川本純子(長田区)

1月17日ー、一生忘れられない日。

一瞬夢ではないかと思った。夢ならどんなによかったらう。強い揺れに驚いて飛起き、目を開けても真っ暗な部屋。手探りで電灯の紐を探す。探りあてて引っ張ったが灯りのつく様子はない。

父が向こうの部屋から呼んでいる。「大丈夫!」と応えた。階段に備えてあった懐中電灯を探り出し、真っ暗な部屋の時計を照らした。6時前だった。

外がざわついているので外に出ると近所の人が大勢いた。暗闇の中で灯りは皆が待っている懐中電灯だけだった。足元を照らすと地面に大きな亀裂が走っていて、自宅の石段も二つに割れて、大きく口を開けた溝に落ちていた。

地震の被害は時間が経つにつれて大きくなっていった。南の方から煙が上がった。近くに住む祖父の家へ急いだ。途中でたくさんの懐中電灯の灯とすれ違った。祖父の家へ到着し、割れた窓から覗くと、中は悲惨な状態だった。中からキャンキャンと犬が鳴いている。無事のようにだが助け出すことができない。家は道に向かって大きく傾いていた。それからすぐに祖父母は助け出された。もちろん犬も無事だった。二人はパジャマに素足だが怪我一つしていなかった。避難する途中、近所から上着と草履を借りた。

私はその後、家に戻ったが、日が昇り明るくなった部屋の中は、急いでいたのと暗かったので分からなかったが、足の踏み場もないほど物が散乱し、ガラスの破片が飛び散っていた。壁には何本もひびがはいっており、また地震があると危険なのですぐ近くの高校に避難した。

避難所で迎えた夜は、停電のため懐中電灯の光だけでとても暗かった。何度も外に出ては星を見た。朝から夜になるまで火災は次々に起こり、地震後一日目の夜は不気味な赤と黒の空の下で、サイレンが鳴り渡り、また地震が来るのではないかと心配ばかりしていた。

翌日、中学時代の友人と会い、地震で友人の一人が亡くなった事を知らされた。言いようのない悲しみと悔しさで一杯だった。

避難生活はとても辛く、寒さが厳しく食料も足りない生活だった。今までテレビなどで、別の場所で避難生活を送っている人達の様子を目にしていたが、まさか自分が同じような状況に追い込まれようとは夢にも思わなかった。いつも、大変だとか、可愛そうだと思ってきたが、自分が災害を体験して初めて知った、今までの何げない生活こそが何にも代えがたい幸せなのだ。



地震で知った心の絆

3年生 蓬 菜 晴 美 (小野市)

1月17日午前5時46分。後に「阪神大震災」と名付けられる大地震が起こりました。

その時私は、何が起こったのかははっきり言ってよく分かりませんでした。ただただ恐ろしくて、布団を頭からかぶり身を守ることで精一杯でした。地震がおさまってから家族全員が無事だったと分かりほっとしたのも束の間、度重なる余震に大地震の恐怖が重なり、落ち着くことができませんでした。私の家は学校から随分離れているので、学校は大丈夫だと思い、いつもの通り支度をして駅に向かいました。しかし、いくら待っても電車は来ませんでした。「遅刻かな」と思いながら家に引き返して、初めて落ち着いてテレビを見てみると、街は悲惨な状態になっていました。昨日まで何も起こらなかった神戸。新学期が始まり、「頑張るぞ」と意気込んでいた私の気持ちと、いつもの見慣れた風景が同時に崩れていったような気がしました。ただ呆然とブラウン管に映る変わり果てた神戸を見ていました。

急に神戸に住んでいる友人のことが心配になり、電話をしてみました。何度かけても話し中やNTTの「大変混雑しております」ばかりで、心配が募る一方でした。そして、死者や行方不明者は益々増え続けていきました。ようやく友人と連絡が取れたのは震災から一週間も過ぎてからでした。それも避難所からの電話でした。

今回の地震は、まるで私達人間が築いた物を全て打ち砕いたように感じました。私はこの地震で人間とは弱い生き物であり、そして、強い生き物なのだという事が分かりました。建物や高速道路など、人の造ったものは見事に壊れてしまいましたが、瓦礫の中で人の心の絆はとても強いものでした。

地震に対する恐怖はやはりまだ残っていますが、この教訓は忘れず今後の地震対策に生かして行きたいと思っています。



JR新長田駅



生きることの意味と命の尊さ

3年生 居谷美保(明石市)

あの朝、私はベッドの中で寝ていました。ゴオーという地鳴りがして、次の瞬間に激しい揺れがきました。だんだん激しくなる揺れを、体で感じながら私は死の恐怖を感じずにはおれませんでした。

私は、ただ恐ろしくて、目をつむって布団を頭からかぶって、揺れが収まるのを待つか手がありませんでした。死の恐怖が過ぎると、目の前には足の踏み場もないほどの、私の部屋がありました。いったいどうなったんだ、私の頭のなかは混乱して現状が把握できませんでした。そして、神戸の街が、淡路の街が、さらには学校があんな惨めなほどに破壊されていようとは、想像もできませんでした。確かに、経験したことのない猛烈な揺れではありましたが、まざまざと自然の猛威を思い知らされました。

私の住むところは被害も少なく、電気やガスがストップすることはありませんでした。ですから、テレビやラジオが伝える被害の大きさに、これは夢に違いないと心から願う自分と、現実を正面から受けとめて頑張らなくてはと思う自分がいました。そして何かしなくてはと思いながら、何もできない自分が悲しかったです。ただ報道機関から流れる情報を見ているしかありませんでした。どうすることもできない、何もできない事に苛立ちを覚え、辛く、自分への怒りに変わり、ついに涙が頬をつたいました。

一瞬の出来事が、こんなことになるなんて、なんと恐ろしいことでしょう。でも変貌した街のここここで、必死に生きようとしている人々の姿は、なんと美しく、力強いものだったでしょう。ひとの生命力を感じずにはおられませんでした。

人間の関係が薄く、弱くなった現代と言われ始めて久しいですが、この度の震災は、改めて絆の強さを自覚させられました。失ったものは多いです。が、得たものもありました。こんな経験で、それを知ったのは残念でしたが、これからの私にとっては生きる力になるものでした。

こんなに真剣に生きることの意味について考えるのは初めてでした。命の尊さについても同様です。生と死は対立するものではなく、同じものなのだ、死は生によって意味をもち、生も死によって充実したものとなる。だから一日一日を悔いのないものにしなければならないのだと思います。

震災はこういった意味で、苦しかったが、たいへん貴重な体験でした。これからの生きる糧として一生涯、大切にしく思うとともに、私達の子供や孫に語り伝える義務があると思えてなりません。



阪神大震災で感じたこと

3年生 齋藤 亜砂子（加古川市）

あの朝の一瞬の出来事が、こんなに大惨事になるとは予想できませんでした。最初は、いつもの軽い揺れだろうと感じていました。が、なかなか揺れは収まらないし、逆にますます揺れは激しくなってきました。と同時に、言いようもない恐怖感に襲われました。両親が私の部屋まで様子を見に来くれましたので、ひとまずは安心することができました。

しかし、テレビで悲惨な街の映像を見るまでは、いつもより揺れが強かっただけとしか思っておりませんでした。“兵庫県南部大地震”と画面に映し出された時、胸がギュッと締めつけられたようなショックを受けました。親戚、友人、それに学校、父の会社はどうなっただろうと、急に心配になってきました。

この度の地震で、一番恐怖を感じたのは揺れよりも長田区に発生した火災でした。見慣れた風景がみるみる炎に包まれていくのを目の当たりにして、「これは嘘だ、夢なんだ」と思い込もうとしました。でも、両親が慌てて長田区に住んでいる祖父母に電話しているのを見ると、やはり現実なんだと思い知らされました。夜になっても火は消えない、電話も繋がらない、その夜は不安で眠れませんでした。ようやく祖母から連絡があった時は、声を聞いただけで嬉しく思いました。その後、祖父母は私達の家に避難し、やっと気持ちが落ち着きました。

私の知り合いは無事でしたが、死者や負傷者、行方不明者は増加し続け、今でもなお避難生活を余儀なくされている人が、まだまだ大勢います。そしてまだ余震も続いています。その度に、また大地震が起こるのではないかと恐怖で体が震えます。

そして先日の登校日、倒壊した校舎は私達が卒業するまで再建されないと聞かされた時は、ほんとうにショックでした。実際に目で見て分かっていましたが、今年は最後の学年なのにと残念な気持ちで一杯です。

地震は天災だから、人間の力ではどうすることもできません。起こってしまった事は元には戻らないので、生き残った私達はこれからどう行動すべきか、前向きに考えなければなりません。この地震で感じたのは、追い詰められた時の人の心は様々で本音まで見えてしまうという事です。お互いに助け合いながら強く生きて行こうとしている人達もいれば、自分自身も被災していながらも、避難生活を送っている人達の為にボランティア活動をしている人もいます。それなのに、倒壊して留守になった家に盗みに入るような、不心得な人もいます。

私達は不幸にも喜ばしくない体験をしてしまいました。今私は、この災害を乗り越え、自分の意志をしっかり持って、力強く生きていきたいと思います。そして、もう二度とこんな恐ろしい体験をすることが無いように願うばかりです。



阪神大震災で学んだこと

3年生 上原 有季 (加古郡)

1月17日の大震災で私は様々な事を学びました。そしてまた、失った物もたくさんありました。それに気がついたのは、震災後初めて登校した2月8日のことでした。震災の前の見慣れた景色が戦後の広島のように焼け野原と瓦礫の山と化していました。テレビの画面で何度も見慣れている筈なのに、自分の目で見ると、「ここはいったい何処なのか」と思うほど無残に変わり果てていました。

私は神戸の街が大好きです。通学時に車窓から眺める美しい景色は、いつも私の心を慰めました。田舎から通学している私にとって神戸は、毎日何かを発見できる素敵な街でした。しかし、今、目の前に広がっているものは、瓦礫の山と人々の悲痛な表情でした。私が知っている美しい神戸の姿は何処にもありません。

鷹取の街はゴーストタウンのようでした。鷹取だと分かった瞬間、とても辛いと思いましたが、後で落ち着いて考えてみると、荒れた街でも地元の人達にとれば大切な街なのにと、悔しい気持ちで一杯になりました。テレビで見た新長田も、消防も手が出せないほどの焼け跡が広がっているのを見ていると、悲しくて涙が止まりませんでした。

街はいつかまた元通りになるでしょう。でも、亡くなった人々の尊い命はもう取り返せないし、遺族の方々の無念な気持ちや悲しみは、すぐには癒える事はないでしょう。

私達には、何も出来ないのでしょうか。幸い私の家は無事でしたが、もし倒壊したり家族を失っていたら、どんなにつらいでしょう。そう考えると、どんなことでもいいから手助けしたいと思います。地震という自然の力には勝てませんが、皆で力を合わせれば何でも出来るし、苦難を乗り越えることも出来るはずです。

しかし、人の不幸に付け込んで、家賃を不当に吊り上げたり、泥棒が横行するなど、同じ人間として良心が痛まないのかと不思議でもあり、腹立たしくてなりません。人間は一人で生きているわ

けではありません。人生の中で幾度となく助け、そして助けられることもあるはずです。助けられたことがあれば、次は困っている人を助けてほしいと思います。自分さえ良ければという考えを、困った時はお互い様と考え直してもらいたいと思います。

今回の地震の対応が遅かったのは残念ですが、この貴重な体験を、今後の災害対策に役立ててもらいたいと考えています。それは、地震で亡くなった方々への供養にもなるでしょう。生き残った私達は、一度に消えてしまった五千人もの尊い命を決して無駄にはしないだろうと、私は信じています。そして、1月17日の出来事は決して忘れてはならないのです。

私はこの地震で、人間の愚かさや強さなど、学校では学ぶ事が出来ない真の勉強を教わったような気がします。生き残った人間の一人として、人の役に立つ大人になりたいと思います。



阪神大震災の詩

2年生 鈴木美佳(尼崎市)

もう見ることのない町になってしまった。もう戻ることのない町になってしまった。こんなことになったのは十七日五時四十六分に起きた地震。

誰もが知ることのない、恐ろしい地震が起こった。

たくさん死者を出した、けが人も。

そこから何もかもがなくなった。

なくなってはいけない笑顔さえも奪われてしまった。

ほんのいっしょんになにもかもが。

泣いたり、笑ったりしてもあの美しい町、道、人々は決して帰ってこない。

帰ってこない。

もし戻れるのなら、いつのことだろうか、早く戻ってきてほしい。

美しい神戸。明るい人々。賑やかな町。

道、そして笑顔、

一日も早く戻ってきてほしい。

「学校の詩」

さようなら校舎。

古びた校舎。美しい校舎。

私のことを忘れないで。

そう、想えば浮かび来る、一年間学んだ教室シーンとした教室。笑い声の溢れる教室。

黒板にラク書きしたあの日。

運動部のかけ声がいつも校舎に響いていた。

下校のチャイムが鳴っても終わらないクラブ、おしゃべり。

楽しいこと、面白いことがいっぱい詰まっている校舎、一時さようなら。

また会えるよね。きっとまた会えるよね、きっと新しくなって、帰ってきてくれるよね。

みんな待っています。

あなたが帰ってくるのを。



阪神大震災について

2年生 田上登志子(尼崎市)

(1) 自分自身に関して(恐ろしい体験)

1月17日、午前5時46分。忘れもしないあの大地震。私が目を覚ました時、ものすごく揺れていて、最初何が起こったのかわかりませんでした。頭が真っ白になって、布団にしがみつくことしかできませんでした。父と母と妹が一緒に部屋に寝ていて、私は隣の部屋で寝ていました。幸い私の部屋のタンスは、倒れてきませんでしたが、父達の部屋のタンスは全部倒れてきて、下敷きになっていました。揺れがおさまって、なんとか出て来ることができた父が「早く外にでなさい」と言ったので、1階に下りてみると、机や金魚の水槽、食器棚とかほとんどなにもかも倒れていて、とても驚きました。

母が金魚を助けている間、私はペットの猫を探しましたが、どこにもいませんでした。しかたなく外に出てみると、近所の人達がパジャマ姿のままでした。父が、ラジオを持ってきてくれたので聞いてみると、神戸が震度6と言ったので、クラスの友達が、すごく心配になりました。「尼崎でこんなにひどいのに、神戸の方は一体どうなっているんだろう」と思いました。1時間ぐらいして外が明るくなってきたと思ったら、西の空が紫色になっていたので「おかしいな」とと思ったら、火事になっていました。結構遠いはずなのに、煙がすごくて空が真っ黒になってしまいました。火

事になった家は、文化住宅らしく、10人くらい亡くなったそうです。もし、これが昼間だったらと思うと、ゾッとします。

家に戻ってみると、外壁が見事に落ちていてトイレが外から見えるほどでした。くつをはき、手袋をして、家の中の片づけをしながらテレビを見ていたら、神戸が、どこかに行ってしまったような気がしました。特にJR新長田駅周辺が火の海で、あまりのショックに泣きそうになりました。学校は燃えずにすんだのは、よかったけれど、学校の周りや自分の知っている場所がなくなっているのは、とてもつらかったです。

(2) 自分と人との関わり（友の死に直面して）

朝美の死を知ったのは、夜中の1時ごろテレビを見ていて知りました。テレビに名前が映った時、心臓が止まりそうなほどショックでした。すぐ友達に電話すると、友達も知っていて、大声で泣きました。どれだけ泣いたかわかりません。最後に会ったのは、13日の放課後です。私はその日、日直で帰りが遅くなったので、困っていたら、朝美が待っていてくれて、朝美と萩本さんと私の3人で駅まで行きました。駅で千綿さんと、とっこ（中野さん）に会ったので、萩本さんとは新長田駅で別れ、朝美とは兵庫駅で「また火曜日な。」と言って別れたのが最後でした。それを思い出すと、とても信じられなくて、またいつものように「としこ！」と言って絡んできそうな気がしてなりません。よく先生に叱られていたけれど、明るくて、やさしくて、友達思いで、「どうしてあんないい子が、こんな目にあわないといけないんだろう」と、とても悔しいです。

私が今、大事にしている物は、朝美のくれた年賀状や手紙、クラスの集合写真です。私は一生、絶対に朝美のことを忘れないと思います。父も16才ぐらいの時、友達が亡くなったそうです。その友達は自衛隊みたいな所に入っていて訓練中に亡くなったそうです。父は私に、白黒の古い写真を見せてくれて、その友達と父が写っていました。「生きている内は、いろんな別れがある」と父が言っていました。私も自分の子供ができたら、阪神大震災のことや、朝美のことを話したいと思います。そのころになれば、神戸も元の神戸に戻っているでしょうか。





阪神大震災 一人の死を体験してー

2年生 篠原 ユミ (西宮市)

1月17日(月)午前5時46分。

私はこの地震のことは忘れてはいない。いや絶対忘れることはない。

この日の朝、寝ていても何か揺れていると思って、なんとなく目を開けたとたん、大きな揺れと雷が落ちたかのような音がしたので、地震と分かった私は、大きな声で「お姉ちゃん」と呼びながら、布団を頭までかぶりもぐっていた。そんな時「だいじょうぶ?」という母の音がした。姉と弟はすぐ布団から出られたが、私は、足の上に自分の机、頭の上にはミニコンポが落ちていたので出るに出不れずなんとか母と弟に助けってもらって、懐中電灯とラジオをもって窓から出た。

父の声がしないから「ひょっとして?」と思ったが、ラジオで「午前6時です」と言ったから安心したのもつかの間だった。阪神高速がななめにかたむいていると聞き、父は今、どこにいるのだろうか?と心配になった。そんな時、近所に住んでいるおばさんとおじさんがまだ出て来てないのを知り、家の方まで行くと、一階がぺっしょんこで2階が1階に…。そこには、高一の男の子がいるのだが、そのこは2階に寝ていたのですぐに出てくれたが…。約3時間がたち、おばさんが出てきた。近所の男の人たちで助けだしたのだ。しゃべれるのでだいじょうぶだったが、顔にキズがあり、足のあたりをいためたようなので、すぐに病院へ連れて行った。あとは、おじさんだ。声もしない。何も聞こえない…。近所の人たちで助けようとはしたが、助け出そうとしたけれどムリだ。そのうち、救助隊がやってきて出してはくれたが、もうだめだった。生きうめの時からひょっとして、とは思っていたのだが、まさかそれが本当だとは…。

お昼に近づくにつれて、自分の荷物だけでもと思い、近所の人たちみんなが、自分の家に帰って、服やら何やら取り出していた。その時自分の家を見ると、かわらは半分以上落ちている、壁はぐしゃぐしゃ、玄関は、ガラスが割れて戸がずれて開かない。何とか着がえとかを引っ張り出して袋に詰めた。

その時、近所で火事があった。友だちと見に行ったが、3軒も焼けていた。その辺の人たちが、どぶ水をバケツにすくって消していた。ついでに、その辺りをうろろと歩き回ったが、家がぺっしょんこだったり、神戸よりに傾いていたりしてすごかった。

友だちの家も斜めに傾いていた。それでも、私は家の中に入って、着替えや他に必要な物を出していた。そんなことをしながらも、避難場所をさがして、自分の家を後にしていた。他の近所の人

たちも避難場所に行っていた。とうとうみんないなくなった。父は朝いったん家を見に帰って来たのだが、会社の人のバイクでできたから、また会社に戻って車をとって来ると言ったまま帰って来ないのだ。もう、時計の針は、6時30分。あたりは暗い。ガスくさい。そんな時、避難場所から、近所のおばさんが心配してきてくれた。そして、「まだ、場所空いてるから来たら」と言ってくれた。もう、寒い。暗い。ガスくさい。おなかが空いたから、自転車に布団を積んで、姉、弟、私、おばさんと4人で西宮の中央体育館に行った。母は、父が来るまで待っていると言うから、待っていた。私たちが中央体育館に着いて、30分ぐらいたってから父と母が来た。その日の夕飯は、二人に一個のおにぎりと、つけものだけだった。

翌日の朝、いとこの家が大阪で、だいじょうぶだったので、いとこの家に行った。その日から3週間ほど、いとこの家でお世話になった。その3週間に、何度か、2、3日に1回ぐらいの割合いで自分の家に帰って、学校の勉強道具、制服、机の中の物など、片づけに行っていた。

この地震で、中学校の時の友だちが1人亡くなった。その子の家は、文化住宅で、1階に住んでいたの、ペしゃんこだった。両親は何とか助かったが、私と同じ年の女の子と、その一つ下の中学3年の妹もあの地震で亡くなった。すごく悲しかった。仲の良かった友達を亡くしてしまったことはすごく悲しいし、ショックです。でも、その子からもらった誕生日プレゼント（コップ&タオル）は、大切に使っています。その子と一緒に写っている中学の卒業式の写真を見ると、涙が…。でも、まだ友だちが亡くなったという実感が全然ありません。新聞もテレビにも名前が載っていても、亡くなったというのが信じられません。

今は、仮設住宅が当たるのを待っています。早く当たってほしいです。今は、仮の家として、大阪に住んでいます。早く西宮に戻りたい。早く、家を建ててほしい。

この地震で、自分が体験して、地震の恐ろしさが分かった。今まで地震なんて何とも思っていなかったけれど、余震がくるたびに、緊張してしまうのです。1000年に一回の大地震を体験してすごくイヤな気持ちです。5,000人以上の人たちの命を一瞬にしてなくしてしまった。

この地震は絶対に忘れられない…。

1995年1月17日（月）午前5時46分のことを…。





地震速報

2年生 外山 恵（西宮市）

1月17日、午前5時46分。私は、夢の中にいた。

なんだか妙に、気持ち良かった。フワフワしたベッドの上で寝返りをうっているような感じだった。でも周りの空気は何とも言えないガスくささ。その空気の悪さに私は目を覚ました。辺りは、真っ黒だった。何が起こったのか全く分からなかった。私は、いつも部屋を暗くして寝る。『ぞく』に言う、“豆球”すらつけたまま寝ない。だから、手さぐりで布団の周りを調べる。なんだか本らしき物体が、手に伝わってきた。その時もまだ、なぜこんなにガスくさいのか。なぜこんなに部屋が散乱しているのか。そんな時、兄が上の部屋から飛んで来た。目の悪い私は、夢中でメガネを捜した。いつも置いてある場所を捜す。しかし見あたらない。やっとのことでいろんなプリントの山の中から見付かった。そして、私の部屋にローソクがあるのを思い出した。さいわい私がいる近くにあったので、ガスくさかったのも忘れてマッチをすった。爆発はなかった。今、思えば、バカな奴だと思います。ローソクの火でやっとなんかの状態が見えた。

『ヒドイ』

そうこうしてる内、兄が言った。

「とりあえず出るぞ。」

だけど、私の部屋の戸が開かない。そう知った時、私は始めて立ち上がった。『傾いている』『どういうこと?』まさにそこは、C級遊園地で体験できるもの。そして『うん百円も払ってしまった。』と必ず1度は失敗してしまう。そう……、『ビックリハウス』それから、我が家はそう呼ばれるようになった。それはそうと、部屋に閉じ込められた時はあせった。いろいろ試した結果、私のゴルフクラブでドアをやぶった。アイアンがへし折れた。母の声も聞こえる全員無事のような。とりあえず外に出ようと階段をおりる。最後の階段がない。ゆっくりと階段をおりる。兄が玄関のガラスを割っている音も聞こえる。やっとのことでパジャマのまま脱出した。震度7。

星空がこんなにきれいに見えたのは何十年ぶりなんだろう。私の大好きなオリオン座も。

『夜明けが見えてきた。』

神戸、西宮、淡路……。

だから歩こう。

だから頑張ろう。

もう助けを求めてはいけない。

一人で歩いていこう。

「さ、地球の怒りをしずめて下さい。」

これで地震速報を終わります。



阪神大震災にあって

2年生 澄川志歩（芦屋市）

地震があった時、私は自分の部屋で寝ていた。

一瞬、宙に浮いた感じがしたので目を覚ますと、突然大きな「ドーン」という音と共に、激しい縦横、左右の揺れがきて、タンスや机の上に置いてあった物が落ちてきた。私は呆然としたままで、地震がおさまるまで、真っ暗な中でその様子を眺めていた。

しばらくたって、家族に助けを求めて大きな声で呼んでみたけれど、返事はなかった。リビングには食器棚や本棚、ふっ飛んだテレビや電子レンジなどが散乱していたので、自力でリビングまで脱出した。祖母は、タンスの下敷きになるところだった。が、父が何とか助け出したので、肩にタンスが軽くあたる程度で済んだ。

太陽が昇るにつれて、家に日が入りはじめ、それと同時に家の中の様子が次第にわかり始めた。一番ひどい状態だったのが、台所だった。冷蔵庫が開いていて、中にあった物が流れ落ちて、前夜の残りの味噌汁が飛び散って、砂糖がそこらじゅうにこぼれていた。

はじめの3日間ぐらいは、毎日後片付けやら、食糧の確保などで忙しかった。エレベータが止まっていたので、一層大変だった。

1週間経った頃から、学校や連絡が取れない友達の事が気になりだした。火災が一番ひどかった場所にある学校の状態が、知りたいけれど電話はつながらないし、友達の家に何度も何度もかけてみたけれど、これもまた、なかなかつながらなかった。

日に日にストレスがたまってきて、体調もおかしくなってきた。そんな中で、友達から電話がかかってくると、とてもうれしかった。あと、楽しみといえば、週に一度の風呂だった。車で家族全員で堺まで行って、時には食事をして帰ることもあり、そのほんのつかの間の時間だがすごく楽しみだった。今は近くに温泉が湧いたので、祖母と二人でとか、友達と週に何回か入りに行ったりし

ている。でも私達はまだ恵まれている方なんだと思う時がある。今まで苦勞して家を建てた人や、ローンなどが残っている人は、これからどうして生活をしていけばよいのかと考えて、苦しんでいるのを知ると、私達の不満など小さな事のように思えてくる。クラスの中にでも、何人かは家が全壊で住むところがなく、テント生活を送っている。

今回の地震は、私達に沢山のありがたいものを教えてくれたと思う。水や自然、そして食糧。私達の周りには、こんなに沢山のありがたいものが溢れているということを改めて感じた。そして、考えさせられた。最近になって、人間が贅沢になってこの世の中に罰が当たったのだという人がいる。そうかもしれない私も思った。

まだまだ今までのような神戸、生活もすぐには戻らないと思うけれど、以前より一層よい街づくりをしてほしいと願っている。これはすべての人の願いでもあると思う。



阪神大震災にて

—一瞬もうだめかと思った—

2年生 服部 ゆり (東灘区)

私はなぜかわからないが、ぱっと目がさめた。そして天井を見上げ、タンスの上にある人形を見た。すると、人形がグラグラと揺れだした。その揺れは、次第に大きくなってきて、私は無我夢中で「キャー」と言いながらフトンをかぶりました。でもそのキャーと言う声もほんとうに声に出したかどうか覚えていません。フトンをかぶってもまだグラグラと揺れていて、かぶっていたフトンの上に何か倒れてきて、その重みで身動きがとれなくなってしまいました。

母が私の名前を呼んでいました。私はその声に対して返事をしたのですが、フトンや上に載っている物のせいで母には聞こえていなかったらしいのです。母は私を助けようとしてくれたのですが、家の中は真っ暗でいろいろな物が倒れていたのを助けることができなかったそうです。そして母が階段を降りて行く音が聞こえ、私は2階に一人になってしまいました。後で聞いた話によると、なぜ下に降りて行ったのかと言うと、返事がないので駄目かと思っていたらしいのです。私はフトンの中から一生懸命出ようとしたのですが、上に載っている物が重くてなかなか出られなくて、だんだん息ぐるしくなって、一瞬もうだめかと思ったこともありました。でも自力でやっと出ることができ、みんなが心配だったので急いで下に降りました。みんな無事だったので良かったです。

このときはまだこんな大事になっているとは思っていなかったのも、一番最初に頭をよぎったこ

とは、学校に行かないといけないのにどうしようと思いました。でも母に学校なんかに行ってる場合じゃないと言われました。その後、私の家族はみんな服に着換ええました。でも私の部屋はグチャグチャなので服が取れませんでした。しかたなく制服を着て外に出ました。外に出ると騒がしかったのでその方向に行くと、家にとじこめられている人がいたらしく、ドアを壊していました。そして空を見ると、遠くの方で赤い色が見えました。それは火事でした。それを見て私は近所に住んでいるところが心配になり、兄と二人で見に行くと、みんな無事だったので安心して家に帰りました。

そして夜が明けて少し明るくなりました。その間にも何度か地震がありました。それからしばらくすると、鳴るはずのない電話がなりました。それは部活の友達でした。電話をしている間に近所を見に回っていた父が、帰ってきて、「高速道路が落ちている」と言ったので私はそのとき初めてこの地震の大きさを知りました。その話を友達にして電話を切りました。それから私は兄と二人で阪神高速を見に行きました。それは想像を越える恐ろしい物がありました。私はすっごくびっくりしました。高速の反対側がまったく見えないのです。家に帰ったのですが、水も電気もガスも全部止まってしまったので情報が入ってきません。私は慌てて小さなテレビを持ってきて見て、初めて他の所の状況が分かりました。でもすぐに電池がなくなってしまい見る事が出来なくなりました。

そして時間がたち、部屋の中に光りが入ってきて明るくなったので、部屋を片付けようと上に行って、初めて自分の上に倒れていた物が分かりました。それはたくさんの服を掛けていた鉄パイプでできたブティックハンガーでした。その他の所を見ると、私の机の上にタンスが落ちていたので、もしフトンをかぶっていなかったらと思うと背筋がぞっとしました。やっと部屋が片付け終り、外に出ると中学校の時の友達が心配して見に来てくれていました。私は心配して見に来てくれる友達がいることをうれしく思いました。友達が帰り、私の家族は食べ物を買いに大阪に行きました。でもどこに行ってもたいした物は売っていませんでした。午後3時半に家を出たのに帰って来たのは朝方の4時ごろでした。家に帰ったのですが、外も家の中も真っ暗で、電気もガスも付かないのでとても寒かったです。ひとつの部屋で五人かたまって寝ました。寝てから2時間ぐらいたった6時ごろに大石の方でガスもれが発生したから避難して下さいと回って来たので、着がえや毛布を持って逃げました。逃げている途中で、ガスの発生が止まったので家に帰りました。私はこのとき、すごく自分達のしていることが情けなく思えました。私の家族はこのままここにいてもしかたがないと思ったので、京都のおばあちゃんの家に行くことにしました。行くのに6時間ぐらいかかり、途中にたくさん家が壊れていたのを見ました。

けれども京都に行くと何もなかったかのように平和でした。私達より少し遅れて別の所に行っていた姉が着き、無事な姿を見る事が出来て良かったです。京都には1週間ぐらいたったのですが、その間にも色々なことがありました。そのうちの一つは17日電話を掛けて来てくれた友達のお兄ちゃんが亡くなったという事と、私の幼なじみの友達がなくなったという事です。その子は私が3才ぐらいの時からずっと一緒に遊んでいた一番の親友でした。私はこの時ほどこの阪神大震災を恨んだ

ことはありませんでした。京都の暮らしはとても平和でのんびりしていて、私がこうしている間にもテントなどで暮らし、辛い思いをしている人達があくさんいるのに悪いなと思いました。そして家に帰りました。電気はついていたのですが、水もガスもまだ出ていません。

そして1か月が過ぎた今も、地震はまだ続いています。今日も震度3ぐらいの大きな地震がありました。それから水とガスもまだ出ていません。毎日が水くみにおわれています。私は友達や同じ学校の人そして五千五百人以上もの人の命をうばった阪神大震災が憎い!! 私はたぶん平成7年1月17日5時46分のことは一生忘れることができないと思う。私はあの5時46分が今までの中で一番恐いと感じました。私はもう二度とこんな思いはしたくありません…。



阪神大震災にあって —パニックになった人々—

2年生 可 児 昌 子 (東灘区)

今までTVの中だけのことだと思っていた災害が、自分の身にふりかかってくるとは思いもしなかった。地震がおきた時は何がどうなったかわからなかった。でも、近くの親せきの家までの道、ビルが傾いたり、家が崩れていたり、電柱が倒れていたり、大変なことになってしまった、ということはずぐに分かりました。私の家も階段の踊り場が落ちて、壊れてしまいました。

その日の夜は車の中で寝て、次の日からは避難所へ移りました。食べ物も水もない中で食べたゆで卵は、今まで自分が食べてきた中で一番おいしいと思いました。今まで自分がどれだけぜいたくをしてきたかわかりました。

避難所では3日目ぐらいから救援物資が届き始めて何百人の人が列を作り、食べ物をもらい始めた。中には、地震のショックか何か分からないけど、イライラしてきた人が多くなってきたみたいで、ケンカを始めたたり、いきなり大声を出したり、食べ物を箱ごと取って行こうとした人とか、見ていると顔もしらない他人だけど、なにか悲しい気持ちになった。いつもは、冷静な人でもこんな時には、パニックになる人が多い。今までとは、ぜんぜん違う人になってしまうのが分かった。身近な人では、いつも何げない顔をしている姉がパニックになった。他には、隣りに住んでいたおばあさん。その時はあんまり変わらなかった母でも、一か月も経てばイライラしてきた。プライベートな場所がない。3・4家族が一つの教室に住んでいるのだから。

私は、地震がおきてから4日目に母方の田舎に一人で行きました。今分かったことだけれど、家

に住んでいたことがどれだけ幸せだったかということが分かりました。家族と一緒に住めることがどれだけ幸せだったかが分かりました。

近所の人が集まっている時に「勉強なんかこんな時は何にもならん。それよりほかのことをなろた方がいい」と言っているのを聞いた時は、複雑な気持ちだった。私が「学校休みかなあ」と言ったら、父に「学校のことなんか今は言ってもらえん。家がないねんぞ」と怒鳴られてしまった。私は、みんなイライラしているから、ちょっとふざけて見せただけだったのに…。

もうこんなことには、二度とあいたくない。



阪神大震災を通して学んだこと

2年生 丹 理恵子（灘 区）

今、神戸の街を歩いても、つぶれた家や焼け跡ばかりです。もう、以前の神戸の街並や、犠牲になった人達の命は、戻ってきません。

私は、この震災で自然の大きな力を知りました。人間が何年も、何十年もの時間をかけて造ったものが、あっという間につぶされました。水もガスも出なくなって、毎日水くみという生活が始まりました。その時はじめて、水やガスの大切さがわかりました。

また、助け合うという大切さも知りました。学校へは行きたくない、いつもそう思っていたのに、急にみんなの顔が見たくなりました。

もう1か月以上たちますが、まだまだ解決していない事は沢山あります。しかし、もう今では前のようにテレビで報道されるということは少なくなってきました。私はこうして、神戸は忘れられていくのかなあと思いました。まだ、沢山避難している人がいます。その人達には、早く家がみつかって欲しいです。私はこの震災で、けがをした人の為に懸命に働いている看護婦の方々の働きに関心を持ち、私自身、あなりたいとあこがれました。

この震災以前は、北海道の災害もそんなに気にとめてはいませんでした。が、やっとその痛みがわかったような気がします。そして、この経験を通して、何か私にもできることを探してみよう、そして実行してみようとする事の大切さを知りました。そして改めて考えてみたということもいくつもあります。現代のくらしは、ライフラインがあってこそ成り立っているということ。人は優しいということ。人は強いということ。助け合い、苦しみを克服することができるのが、人だとい

うこと。これらは、今後の大きな課題となるかもしれません。が、この経験を一生忘れず、私は大人になっていきたいと思います。

100万ドルの夜景神戸が、それ以上になって返ってきてほしいと思います。



ガレージで生活して

2年生 判田知穂(灘区)

グラグラ。ハッと目が覚めた。目が覚めたら自分の体が揺れていた。私は『地震や』と思い布団をかぶった。かぶった瞬間揺れは激しくなった。こわくなった私は「キャー、キャー」と布団の中で悲鳴をあげていた。揺れはなかなかおさまらない。そんな中、私はただただ布団の中で悲鳴をあげていた。布団の中で、『こわい。こわいよ。なんでこんな目にあわなあかんの』と何度も思った。激しい揺れで、机の上の物や棚の中の物、タンスの上の物、低いタンスの上に置いてあったミニコンポまでが落ちた。もちろん私の上にも。幸いタンスなど重い物は倒れてこなかった。

地震がおさまり私は布団から飛び出して部屋から出ようとした。けれどふすまが開かない。となりの部屋から、父や母や兄の声がする。私は、「開けてー」と大きな声で叫びながらふすまをたたいた。母がふすまを開けようとしてもふすまは開かない。兄がふすまを壊してくれ、すきまから出た。

父は1階で寝ていたけれど、すばやく逃げたらしく私が部屋から出た時にはもう外にいた。父は近所の家がつぶれてしまっていたのと、お年よりが住んでいたのも、大きな声で近所の人に話しかけた。しばらくして私達家族は外へ出た。家の裏は公園だったため、近所の人が集まっていた。私達はしばらく公園にいた。公園にいる間、父や兄、近所の男の人はまだ家から出られない人を助けしていました。寒い中、私や弟は父が家から取り出した布団にくるまっていた。素足で外へ出た私達家族は足を切らないようにと、服か何かを足に巻きつけた。こわい。寒い。そう思いながら避難した。

地震がおきて何日かは、父と兄の車の中で夜をしのいだ。食べ物は近所のつけ物屋のビルからいろんな物をもらっていました。日に日に人の数は減り、今では私達家族5人と近所の人4人でつけもの屋の大きいめのガレージで避難しています。夜はボランティアの人達からもらったテントと毛布の中で寝ています。

今でも17日のことを思い出すとゾッとします。それが夜だとなかなか眠れません。『どうしてこ

んなことになったんやろう。これは悪夢で、目が覚めるといつもと同じ朝だったいいのに』とよく思います。一日も早く普通の生活に戻ってほしいです。



「1月17日」

2年生 奥田 敦 予（灘 区）

1月17日5時46分、生まれて初めて信じられないようなことが起きてしまった。「ガタガタガタ」と大きな揺れが始まったとたん、私はとっさに布団で全身を包んだ。それからつぎつぎに大きな音が耳に入ってきて、「私はもう死んじゃうのかなぁ」なんて思った。ガラスが割れる音、ドスンと物が落ちる音、外ではバキッというくずれるような音、一体何が起きているのか想像もつかなかった。そして、ついに私の寝ていたとなりに置いてあった大きなタンスも私の上に倒れてきた。しかし、痛みはなかった。その理由として、倒れたタンスの向かい合わせになっているタンスが一つあったのだけれど、それも同時に倒れたので、ちょうど横から見ると三角形の形になっていた。それでタンスが私の体に触れることはなく、母と一緒に助かった。揺れがやとおさまったのを確認し、タンスとタンスの間から脱出できた。でもまだ余震が続いて不安だった。家の中は足の踏み場もない状態で、台所はガラスだらけだった。

そしてベランダから外を眺めると、高速道路がまるで屋根のようにこちらに斜めに傾いていた。そしてあちらこちらで家も崩れていた。ニュースを見ようと思ってもテレビはつかない。水を出そうと思って蛇口をひねってみるが一滴も出ない。田舎に電話しようと思っても通じないし、もう頭の中はパニック状態。ちょうどそのころからパトカーや救急車のサイレンが鳴り響いていた。私達家族三人は家の中を少しずつ片づけ始めた。出てくるのはゴミになるようなものばかり。ガラスのかげらがほとんどで私は3か所手を切った。掃除機が使えないからゴミの始末もきれいにできない。そうこうしているうちに夕方になったので、近くの体育館に泊まりに行った。すでに人はいっぱいであり空いているような所もなかった。

そして次の日の18日、私達三人は大阪のおばさんの家に向かうことにした。阪神電車は甲子園から西は動いていなかったの、甲子園まで歩くことにした。行く道中いろんな場面に遭遇した。家がめっちゃめちゃに壊れていたり、火事で焼けてしまって黒くなっていたり、その匂いがあちこちからしてきた。こんなにペシャンコになった家の中から脱出できたのかなぁなどと思った家が数多

くあった。そういう家には紙で、“全員無事です”などと書かれてあるのを見ると、たとえ全然知らない人でも“助かったんだなぁ”と嬉しく思ったりした。阪神甲子園までは、私が思っていたよりはるかに遠く、歩いて歩いてもなかなか駅に近づこうとはしない。そのうち、靴ずれをおこしてたまらなかった。何回か短い休憩を繰り返して、私達三人は阪神西灘から4時間半かけて、やっと阪神甲子園に着いた。その時駅に点いていた電気をみて、こんなにも違うんだなぁと、久しぶりの電気の明かりをみて感動した。その日の夜に食べた夕食はかなりおいしく思えた。が、死亡者リストの中から中学校の時の友達2人の名前を見付けてしまった時は悲しかった。

そして今、こうして大阪に住んでいるけれど、また私のマンションが住める状態になったら、絶対に神戸に帰りたいです。もう二度と、こんな大きな地震はこないでほしいと思います。



阪神大震災 一家が崩れた一

2年生 澤井春子(灘区)

1月17日午前5時46分、それはおこりました。

ドーンという音と同時に目が覚め、家がすごくゆれていて、タンスや本箱などが上からたくさん落ちてきて、壁土がポロポロ落ちてきました。一瞬何が起こったのか分からなかったのですが、父の声が聞こえてきました。「大丈夫か。布団かぶっとけ」と叫んでいて父は逃げ道を探していました。窓を開けると、今まで見て知っている風景ではなく、かたむいた空がすごく高く感じ、私は布団の中でふるえていました。なんで、なんでと思いながら弟が、「はるちゃん生きとーお？」と聞こえて私は「生きとーわ」というだけの会話で後は、下の家の人の“助けて。誰か”という声が何度も何度も聞こえてるだけでした。やっとのことで逃げ場を見つけた私達五人は、窓から隣の家のベランダをつたって外へ脱出しました。外はものすごい状況で、戦後みたいで近くの商店街あたりでは火事が起こっていました。近所の人達で生き埋めになっている人を助けたり、助けた時にはもうダメだった人も何人かこの目ではっきり見ました。亡くなった方の奥さんの泣いている姿が、今でも心にやきついています。今でもその場所はほとんどそのまま、たまに父・母・弟に会いに行くといやなことを全部思い出してしまいます。

地震でたくさんの物をなくした気がします。でもその分、近所でも知らなかった人達とも協力できたと思うし、その点ではよかったと思えるようにしたいです。

今まで普通に生活していたことが一番幸福だったんだなぁと感じました。この地震のことは一生忘れることがないと思います。



地震が憎くてたまらない (大石朝美さんの死を知って)

2年生 小林 絢(兵庫区)

1月17日早朝。「ドーン」と体が飛ばされるような衝撃と音で、目が覚めた。その後、とっさに布団をかぶったら、すぐにガラスでできた人形の置き物が碎けて降ってきた。かなり長く余震が続いて少しおさまったかと思われた時、たまりかねた弟が起きてきた。父が、「起きるな！寝とけ！」と叫んだので、私までハラハラした。少し震れもおさまった時、1階で寝ている妹と祖母の無事を確認した。家族全員の無事が確認できたのでホッとして、身体障害者で歩くのが不自由な祖母の部屋で、明るくなるまでみんなでかたまって座り込んでいた。祖母の部屋は背の高いタンスなどがなかったの、物が落ちてくることがなくて、無事だった。

随分外が明るくなった。外に出て近所の様子を見ようと玄関を出ると、我が家の前の家はあとかたもなく、道路はほこりだらけだった。あまりの変わりように、呆然としていた。ずっと友達の事が気になっていたから、公衆電話で何人かに電話をかけた。全く通じなくて心配になったけれど、多分無事に避難して外にいるのだろうと、思っていた。お昼近くになって、近所の中学校の時の同級生の朝美ちゃんが、亡くなった事を聞いた。信じられなかった。信じなかった。急いで電話をかけてみたけれど、通じなかった。

とりえず兵庫中へ避難することにして、近所に住む妹の友達の家族と、私の友達とその姉弟(お父さんの入院で、お母さんは付き添いをしていなかった)とが座る場所を確保した。初めの日と2日目は、夜中に食パンとめんたいこ御飯が出ただけだった。3日目、他の友達に会って、やっぱり朝美ちゃんが亡くなったことが本当だったと知った。私は1日目から、ラジオを気にしてずっと聞いていたけれど、朝美ちゃんの名前が流れなかったので、ちょっと安心していた。でも、本当だった。遺体は村工にあると聞いたので、会いに行った。寝ているみたいだった。今にも起き出して、「絢ちゃん」と言ってくれそうだった。心でずっと話しかけていた。涙が溢れてとまらなかった。朝美ちゃんは起きなかった。ドッキリカメラやったらいいのにな、とばかり考えた。朝美ちゃんは親友だった。一緒に学校へ行って、帰って、遊んで、あほなことばかり言い合って楽し

かった。「絢ちゃんと友達なん自慢やわ」と、言ってくれた時、「何ゆうとんよ、絢も一緒やで」って笑ってたけど、本当に嬉しかった。

中学3年生の時には同じクラスで、みんな仲が良い最高のクラスだった。2人して口をそろえていつも、「3年5組に戻りたい」って言っていた。中学校の時には、今ほどは仲良くなかったから、「もっと早く、こんな風に仲良くなれたらよかったな」とも言ってくれた。もっと長くつき合いたかった。

地震が憎くて、恐くて仕方がない。その日から3日間、避難先の学校でボランティアをした。トイレ掃除や救援物資の配給、校内放送など、することは山ほどあった。ボランティアをしてる間は、文句を言われて腹が立つこともあったけれど、気が紛れた。でも夜になると、また泣けてきて、どうしようもなかった。1日目は眠れなかった。2日目は少し眠った。3日目、4日目は、いろんなことを思い出しては泣いて、眠れなかった。

この地震でボランティアをして、私でも少しは人の役に立てるということが分かった。得たものも確かに大きかったけれど、失った大切な親友の方がもっと大きな悲しみとして残った。どんなに『天災だから』と人からなだめられても、やっぱり親友や住む家をうばった地震が憎くてしょうがない。



阪神大震災での体験 (我が家でボランティア)

2年生 上田美紀(兵庫区)

1月17日に震度6又は7の大きな大地震を体験しました。私の家は長田区と兵庫区の分かれめにあります。家の近くを自転車で見てまわると、壊れた家や焼け跡や最近では亡くなった人へのお花やそなえ物まで、イヤでも目にするようになりました。

長田区のアパートに住んでいるおばあちゃんの家もくずれ、一階に住む一人の老人が亡くなりました。おばあちゃんは必死の思いで崩れたアパートの木材の小さなすき間からはい出てきて助かりました。上沢の近くに住むおばあちゃんの家は半壊でした。お風呂場は壊れて外が見え、天井はほとんど落ちていて、もう一度大きな地震が来たら、2階が1階になるような状態です。私の身内は3世帯もが被害にあいました。学校が休みの間知り合いのおばあさんの家が半壊だったので、くずれた壁とか色々の片付けを手伝ったり、屋根の瓦が落ちた後片づけを手伝ったりしました。1

か月くらい毎日水くみをしたりで大変でした。ガスも3月2日にやっつきました。

この地震では普段しない、すごい体験ばかりでした。なにもかも失った人に比べると、しんどかったけれど、まだまだ幸せなほうだろうと思います。私の家には1月17日から現在も2人の避難民がいます。テレビを見ていると、ボランティアなどをしているすごい人達に負けなくらい、我が家では2人のお世話を一生懸命しています。色々なことの経験を忘れず、物を大切にすることなどをこれからもずっと守っていきたいです。



避難生活を通して感じたこと

2年生 岡 由 香 (長田区)

1月17日の地震以来、私達の家族は、水木小学校に避難することになった。避難してからの2日間は、「食いたい」とか「飲みたい」などという一次的欲求も十分満たされることのない、ひどい状態が続いた。命は助かったとはいえ、それはまるで生き地獄のようだった。やっとな2日目の夜に、一人バナナ三分の一が配られた時には、もう疲れきっていた。

1月20日に電気がついてからは、時々ごはんを配るのを手伝ったりした。そんな生活の中で、ボランティアで来てくれた人の活動を見ていて、とても感心した。地震を体験したわけではないのに、どうしてこんなに、他人の為に、お金に関係なく働いてくれるのだろうかと思議に思った。そしてもし自分が神戸ではない、どこか別の場所に住んでいるのだとしたらと考えてみると、絶対にボランティアをしに来ようとはしないまま、恐いなあとか、すごいなあとか、まるで人ごとのように、テレビを眺めていることだろうと思った。

以前、北海道の地震を知った時のことを思い出してみても、やはりあの時も私はテレビの前で、ただ地震の様子を眺めているだけだった。だからこそ、ボランティアの人達には、本当に感謝していた。

しかし、最近になって状況が少しずつ変化してきた。というのも、皆が、ボランティアの人達や学校の先生達に、「ごはんが遅い」とか、「あの人には、ご飯たくさん入れて、私は少ない」とか、「そのジュース、箱ごとちょうだい」と言っているのだ。ボランティアの人が、「他の人にも平等にせなあかんからダメ」と言うと、その人は、ボランティアの人に向かって、「何や、このクソガキ！お前のもんちゃうからええやろが！」と文句を言っていた。ある時は、先生が放送で、「御飯

のお手伝いしてくれる方、お願いします」と言っても、来てくれるのは、いつも決まった四、五人で、他の人達は自分さえ良かったらそれでいいという考えで、さっさと配ってもらう方に並んでしまっていた。そういう姿を見る度に、同じ避難している者として、恥かしいと思い、またとても申し訳ない気がした。ボランティアできてくれた人達の優しさや行動力を考えたとき、感謝はしても、非難することなどできないはずだと強く思った。

もし、今後、別の場所で、大きな災害が起こったら、絶対にお手伝いに、ボランティアに行こうと思った。避難生活を通して得た体験を生かして……。



崩れた家から助け出されて…

2年生 橋本あや(長田区)

平成7年1月17日、朝5時46分。この歴史に残る大震災を私は経験した。

朝、ものすごい音が聞こえて目が覚めると、もう私の体は動くことができない状態になっていた。自分は今どういう状態なのか、自分の回りは一体どうなっているかなど、一瞬にしていろいろな事を考えた。横の方で祖母の、「地震や、大丈夫か」という声が聞こえた。その時初めて地震が起きたという事が分かった。

たまたま、母は旅行に行っていたので、家には、祖母と妹と私の3人しかいなかった。だから、私が家族を助けないといけないと思った。でも、助けようとしても私の体は動かなかった。かろうじて左手が動いたので、これなら何とかかなと思った。左手で自分の頭の上にある何かをのけようとした。けれど力が出ず、動かなかった。私の上には何が乗りかかっているのか見ようとしても外もまだ暗いし、電気も消えて真っ黒だったので何も見えない。(この時は家具が倒れてきただけだと思っていたけれど、後で天井が落ちていたと分かる。)何とか右手を動かそうとして思いっきり右手を引くとはさまれていた右手が抜けたので、両手でふんばって頭を上げた。『バキバキバキ』と板がはがれる音がした。その音が聞こえると同時に上半身が動くようになった。そして板がはがれると、穴ができて、そこをくぐろうと思って、下半身をひきずる様に穴からはい出した。何とか私の体は動くようになった。

祖母を助けに行こうと思ったけれど、一人ではとても無理なので先に妹を助けようと思った。妹は私のとなりで寝ていた。となりをさわるとタンスみたいなものがあった。妹の声のする方に、手

で回りをさぐりながら、タンスなどの上をはいながら妹の所に行った。でも、妹の声のする方に行っても場所が分からない。妹に、「手が上にのばせるか？」と聞くと、「うん」と言って、妹が手を伸ばした。私は、手で回りをさぐると妹の手と私の手が触れたので、2人で手を握り合った。その手を私がひっぱると痛がったのでどういう状態か聞くとやっぱり上にタンスが倒れているという。そして、そのタンスを動かすのはとても無理だと思った。なにか別の方法がないかと妹の頭の方を手さぐりでさぐると、タンスの上に置いてあった荷物に触れたので、それを一つずつ動かして行って、上の方から妹をひっぱり上げてみると、妹が出てこられた。次に祖母を助けに行った。祖母に、「大丈夫？ 苦しくないか？」と聞くと、「大丈夫」と答えたので、妹と2人で祖母を助けに行った。でも声のする方に行こうとしても天井が落ちていて行けなかった。天井を2人で破って進んで行くうちになぜか2階に行く階段に出てしまった。元の場所に戻ろうとしたら、今度は大きな余震が来て、きた道がふさがれてしまった。私達は動けなくなって、外が明るくなるのを待とうと思ってじっとしていた。その時もずっと祖母に声をかけていた。

少しして目覚まし時計が鳴り出したので時間が7時だという事が分かった。時計が鳴る中、外で親せきのお兄ちゃんの、「あやーっ大丈夫かー？」という声が聞こえて、その時やっと助かったという気持ちになって涙が出て来た。上を見ると2階の窓から朝の光がさし込んでいた。外から近所の人の声が聞こえてきて、みんな大丈夫だったと思って少し安心できた。お兄ちゃんが2階の窓を開けようとしても開けなかつたので、お兄ちゃんが冗談で、「もうどないもできへんわ。お前らそこにずっとうまっとけ」といって笑っていた。なぜかともうれしかった。お兄ちゃんは、窓のガラスを割って、中をのぞいた。お兄ちゃんの顔を見た時、外に出られると思って妹と2人で立ち上がったけれど、窓には手が届かなくて外には出られなかつた。それからしばらくたつてお兄ちゃんは近所からのこぎりを借りて、屋根を破ってくれた。約2時間後、私と妹は外に出る事ができた。外に出ると私は足にケガをした事に気づき、お兄ちゃんは血だらけになっていた。突然寒く感じ、ふるえていると、近所の男の子がジャンパーを貸してくれた。それで寒さはなんとかしのげた。けれどこんどは妹も私もくつがないのに気づき、困っていたら、また近所の子がくつを貸してくれた。

私達は、親せきのマンションに行けと言われて、祖母を気にしながら、マンションに向かった。マンションの一階のエレベーターホールで親せきの方は待っていた。私のケガを見て病院に行けと言うので、病院に行ってみると、もう、廊下までケガをした人がたくさんあふれていて、うめき声もあちこちで聞こえた。

祖母が気になったので、病院からすぐに戻ると、お兄ちゃん達が家の屋根にのぼっていた。お兄ちゃんは、「もう助けるんは無理や」と言ったので泣きながら、「おばあちゃん大丈夫？」と聞くと奥の方で、「おばあちゃんは大丈夫や。お前らケガないか？」と反対に私達を気遣っていた。「うん」と心配させないためにウソをついた。お兄ちゃんは私がケガをした事を知っていたので「お前がおってもしょうないからみんなのどこに行っとけ」と怒って言った。それから仕方なくみんなの

所に戻った。

行く途中電柱が倒れたりして、切れた電線が火花を散らしていたり、火事になっている所もあった。2分とかからない距離なのに、なんだかとても時間がかかったように思えた。マンションに戻って、外を見ていると、前に建っている病院に、たくさんケガをした人が運ばれていくのが見えた。タンカで運ばれている人はごくわずかで、家が倒れた時にバラバラになった家のガレキに乗せられて運ばれている人や、抱きかかえられて運ばれている人の方がはるかに多かった。

そういう光景を見ているうちに、時間が過ぎて、お姉ちゃんが、走ってやって来て、「おばあちゃんが助かった」と教えてくれた。どこに連れて行かれたかを聞くと、近くにある集会所だったので早速妹と2人で行った。行く途中、私の友達に会った。気がつくと、私は友達と2人で抱き合って泣いていた。友達と別れてすぐ祖母の所に走った。祖母の所に着くと、祖母は部屋の真ん中あたりで横たわっていた。祖母は腰が抜けて立てないらしく弱っていた。顔に少しケガをしていた。

その日の夜中、母が12時間かけて帰って来て、そのまま名谷の親せきの家に向かった。そこに5日間居て、6日目に大阪のおじさんの家に行った。船乗り場で、新聞記者に、話を聞かせてくれと言われたけれど、思い出すと涙が出て、何も言えなかった。一月の末に神戸に戻って来て、近くの小学校に避難した。今もまだ避難生活が続いている。

今考えているとたくさんの人達にお世話になった。祖母を助けてくれた近所の方々、親せきの人、お世話になってた学校の先生方、ボランティアの方々、毎日お風呂をたいて下さる自衛隊の人たち。まだまだたくさんの人たちにお世話になった。私は一生この出来事を忘れないだろうと思う。



「5 時 46 分」

2年生 角 矢 美 奈 (須磨区)

1月17日(火)早朝、ものすごい地鳴りと縦横無尽な激しい揺れで、私は目を覚ました。家族全員で二段ベッドの下段にとりあえず避難した。始めは何がどうなっているのか、全く状況がつかめずにいた。1分弱の揺れと言われたが、私には10分にも20分にも感じられた。2分置きに大きな余震がやって来る。やっと見つけたラジオでは「神戸は震度5」。聞き慣れない数字に耳を疑った。だが、すぐ「訂正します。神戸は震度6」この言葉を聞き、体の芯から本当にこわいと思った。(最終的には私のいる所は震度7とされた)

なかなか出てこない私達を心配して、階下の人が戸を叩きながら「大丈夫ですか」と来てくれた。なんだかTVで見たようなシチュエーションだったので、「もうだめかも」と本気で思った。少しでも明かりをとカーテンを開けると、想像もつかない光景が私の目に飛び込んできた。ざっと数えただけでも、5、6か所が火事。長田区の方は広い範囲が燃えていた。すぐ近所では崩れてしまっている家や、一階が無くなっている家もあった。明るくなってから、家に戻り啞然とした。家中かき回されたという表現がぴったりだ。壁にはひび、辺りはガラスの破片でいっぱい、タンスや食器棚は倒れていた。

この震災で、5,500人以上もの犠牲者を出した。もう少し遅い時間だったら、もっと多くの人が犠牲になっていたかもしれない。これは不幸中の幸いと言えるのだろうか。だけどこれだけは言える。この時から大地震との本当の闘いがはじまったと。

神戸も終わりかなと本気で思った中で、唯一私が得たのは、人の大切さ・やさしさ・つよさを肌で感じる事が出来た事。

私は杜宅に住んでいて建物が大丈夫だったので、家にいたのですが、食糧は避難所ばかりで全く回って来ないという状況の時に、近所の人が食べ物を分けてくれた事。あと、TVで見たのですが、インタビューで、何人もの人が、「なぜ神戸から離れないのですか」という質問に「神戸が好きですから」と素敵に笑顔でさりりと言っていた事。

私は高砂の生まれで、神戸には10年以上いるのですが、本当に神戸が好きです。今の神戸を思うと悲しくなりますが、5年先になるか、10年先になるか、神戸が新しく生まれる日を楽しみにしています。

私の家に、掛けてある時計の針は、今も「5時46分」をさしたまま止まっている。



阪神大震災で知ったこと、学んだこと

2年生 丹後由美(須磨区)

生まれて初めての大地震。その時私は2階にある自分の部屋でした。ふと目が覚めたので布団をかぶってベッドの中でじっとしていました。すると突然、何が何だかわからない大きな揺れと、すごい音がしました。それが地震だという事も分かりませんでした。とにかく怖くて揺れがおさまっても動けませんでした。父が2階に上がってきて、子供3人に声をかけそれからはみんなで1階に

かたまっていました。私と祖母は机の下にかくれていました。地震の後には余震があるなんて知らなかったので揺れるたびにビクビクしていました。

携帯ラジオを聞いていると「神戸で大きな揺れ、マグニチュード7.2、震度6、各地で火災が…」などと今までで体験した事のない信じられない事が次々と起こっていると聞くと本当に信じられませんでした。外が明るくなってくるにつれてだんだん気持ちがおちついてきて、割れているガラス製品や倒れたり落ちたりしているいろんな物に気がきました。でも、それくらい全然たいした事ではなくて、これくらいですんだ事、家が無事だった事に感謝しないといけないと思ったのは、電気が通ってテレビがついてからです。テレビを見てはじめて街の様子を目にしました。倒壊したたくさん家、かたむいたビル。どれだけ地震がすごくて自然の力が恐ろしいかを思い知りました。それと同時に火の恐ろしさを知りました。毎日の生活にかかせない火、毎日使っている火、普段ならとても役に立つはずの火が突然、残った家までも燃やしながらどんどん燃え広がっていき、1つの所から出た火が最後には手のつけようがない程になる。その火のすごさはテレビ以外にも私は感じました。家から南（山の向こう）の空を見ると、夕日のように真っ赤でした。煙がすごく、まるで入道雲みたいでした。それが山の向こうで起こっている火災と分かったのはテレビを見てからでした。

通学路が燃え、学校の周辺も燃え、神戸のあちこちで火災が発生し、多くの人が亡くなって、家を失って避難し困っている人がたくさんいる。それを知ると、少しでも手助けをしたいと思ってボランティアに参加しようと思いました。でも混雑しているのでとことわられてしまい、それからは、家に避難してきたことや叔父や叔母の手伝いなどをする毎日でした。最近やっとおちついてから母が病院に行ってお世話するボランティアに行くようになったので、私も2回だけですが母についてボランティアに行きました。いつもなら患者さんの体をふいてあげたりするのですが、その日は初めての訪問看護の日で、私は母と看護婦さんと3人で小学校に避難しているおばあさんの所に行きました。寝たきりでお風呂に入ることができないので体をふいてあげたり、頭を洗ってあげたり、一緒に歌を歌ったりしました。そのたびにとても喜んでくれて、本当のおばあちゃんみたいでした。2回目に行った時、私の事はおぼえていなかったけれど、折り紙を折ったり、話したりしていると、ずっと一緒にいたいと思いました。看護が終わるとおばあちゃんは「由美ちゃん」と言ってくれて「学校が始まったらもう来れないんやろ」と泣きながら言ってくれたのですごくうれしかったです。ボランティアに行くのは曜日と時間が決まっているので学校が始まると行けないけれど、学校が休みの日とかには絶対にもう1回おばあちゃんに会いに行きたいです。私はボランティアとは人のために人を喜ばして、手助けする事だと思っていたけれど、今回は逆に、色々な事を学んで、自分もうれしくて喜ぶ事がたくさんあり、行って良かったと思います。

地震からだいぶ経って、まだ完全に普通の生活に戻った訳ではないけれど、今までの神戸に戻れるように少しでも、手助けがしたいです。

（この作文は「阪神大震災を記録しつづける会」の発行した本に掲載されたものです。）



学校が壊れてしまった

2年生 石橋 七夕美 (垂水区)

1995年1月17日午前5時46分、地震が神戸を襲いました。この地震を兵庫県南部地震、あらため、阪神大震災と呼びます。この地震は、五千人以上もの命を奪っていきました。

あの日、私は1回目の揺れで目がさめ、「地震や!」と思った瞬間、頭の上にかが落ちてき、布団の中にもぐりこみました。「えっ、こんなに揺れるん」って思いました。今まで、こんな大きな揺れを感じたことがないからです。だけど、あの時、こんなひどい災害になるとは夢にも思いませんでした。

数十秒揺れが続き、家にいると危険という親の判断で、揺れがおさまったと同時に外に出ました。玄関の物置から荷物が飛び出していて、靴がどこにあるかさえ、わからなく、手に取った靴をはき外に出ました。すぐに余震がきました。外に出たときから、耳から離れないサイレン、ガスの匂い、そして余震、地震に対して、だんだんおびえを感じていました。一時間ぐらいは余震がひどく続いたと思います。気がついたら、いつのまにか、日の出も終わり、明るくなっていました。

7時ぐらいに、近所の人が車に、エンジンをかけ出したんです。車の中は安全やし、暖房も入るし、情報も入ってきます。いい考えやったと思います。外でも布団にくるまっても、初めは恐怖で寒さも感じなくても、もうそのころには、寒さを感じるようになって、体が、がたがた、ふるえていました。

ラジオで初めて震度6の地震だと知りました。午前中には電気が通りました。掃除に家に戻ると、想像を越す散らかりようでした。一番びっくりしたのが、寝ていた場所から数cmしか離れていないところに、タンスが倒れてきていました。これが頭に倒れてきてたらと思うと、恐ろしくなりました。TVも倒れていてもとに戻してつけると、悲惨な光景が写し出されました。高速道路が落ちてきて、車が落ちそうだったり、家が半壊・全壊していたり、火が回ってきていたり、信じられないようなことが神戸でおこってる。それしか、思えませんでした。その時は、時間がたつにつれて、亡くなられた方の人数がふえてきました。夜には、長田区の火が、へりで映しだされました。水が断水で出ないため、海や川で水をくみ、必死の消火活動が続いていました。その夜、こわくて、ほとんど寝られませんでした。

29日、学校を見るために、車で新長田に連れて行ってもらいました。新長田に近づくにつれ、被害が大きくなっていきました。新長田駅はこわれているし、いつも通っていた道が焼けているし、

店がこわれてたり、信じられない光景が続きました。学校の塀がくずれていて、前から見たら「すぐに授業できるのかな」と思いました。だけど、運動場側に行くと、一階がつぶれていました。「あっ、もうあかんのかな」と一瞬思いました。結局、学校は取り壊して、新しく建てることになったけれど、なにかすごく、淋しい。入学してからずっと通いながら見た光景・勉強した教室・イヤイヤ部活した音楽室・が、あの地震でなにもかもが無くなりました。

今は、第二グラウンドの仮設校舎で授業が再開されています。新しい教室ができるまで。



大震災を体験して「大好きな学校が…」

2年生 仲 典子 (垂水区)

「グラグラ、ドドドッ」という音と共に電気が消えました。そして、この揺れは約20秒程続きました。私は、始め何が起きたのかわからなく、ただ布団をかぶる事しか頭にありませんでした。このまま家が倒れたらどうしようと言う事も考えました。明るくなり始めた頃に、ガス・水道が止まりました。それから段々と家の中の様子が分かってきました。私は、あまりの怖さ・恐ろしさに朝ご飯が食べられませんでした。それに、余震も数分間隔で起きていて外へ出るのが怖かった私は、どこへ行くのもいつも母と一緒にでした。だから母が「ちょっとそこまで行って来るから留守番よろしくネッ」と言われると私が必ず返す返事は、「イヤや私も行く」と言う言葉でした。

それから数日後に用事で新長田へ行く事になりました。電車に乗って鷹取駅で降りて歩きました。歩き続ける道の両端はがれきの山、斜めになったビルや焼失してしまい影も形も残っていない所もあれば焼けて中が空洞ではあるがビルの形だけは残っている所もありました。でもそのがれきの山やつぶれた家等を見ると胸がつまり、涙が出て来ました。

特に新長田は私の大好きな学校がありますが、その駅自体がない事からすごく悲しいと言うかかやしいです。せっかく自分で選び、勉強をして…? 難関を乗り越え入学した学校だから3年間しっかりとがんばって通いたいと思っています。それに私は、学校へ通い、勉強をして…? 休み時間があったと言う神戸女子商業高校へ通う事が大好きです。その学校も今はすごい事になっています。職員室のある南北校舎。つまり私の勉強をしなければならなかった所は傾き、しかも一段下がっています。講堂がある校舎は亀裂が入り、少し焼けているとも聞いています。でも今はいろいろな事情により立入禁止になっています。が、また通い慣れた駅・道路を通り、校舎では笑いあり・涙ありの学校生活を

送りたいです。その校舎が出来あがるまでは、須磨校地に建っているプレハブの校舎でがんばりたいと思います。部活動の方も今度は二年生になり、しっかりと一年生に指導出来るように一生懸命がんばります。

もうこれからは絶対にこんな怖い体験をしたくありません。でも、新長田や東灘・芦屋等のがれきの山を見るとすごくすごくくやしい思いがします。けれど、私の住んでいる垂水はそんなに被害はなく、家族は全員無事で良かったと思います。



心の持ち方

2年生 西口 美代子（垂水区）

1月17日午前5時46分。日本が少しずつ目覚めはじめた頃、大地もまた目覚めた。大地の目覚めは、後に阪神大震災と名付けられたが、喜ばれざる名であり、これは多くの犠牲者を出した。死者5,500人。家屋を失くし、途方に暮れている避難民も大勢いる。

2月17日、私は長田へと足を運んだ。「家の周りにはそんなに被害がないし、テレビを見ているのも実感がわからないから、この目で見てみよう」と、作文のためというのが、動機だった…。はじめは普通の通りだったが、ふと気付くと、辺りは平屋のようだった。1階がつぶれ、2階が真横にある。「この下敷きになって亡くなった人がいる…」そう思うと、怖くなって、慌ててその場を離れた。もちろん死者に対して失礼だとは十分分かっている。それから幾つもの、半壊している家、ビルを見た。他人の家だから、言える事なのかもしれないが、面影を残しているぶんだけ、全壊よりも、半壊の方が切なく感じる。

沈みこんでいく気持ちを引きずりながら、私は火災のあった場所を目指していた。方向音痴の私は、なかなかその場所を見つけられず、「帰ろうか」とあきらめかけた時、通りの向こうの方に、何かが倒れこんでいるのが見えた。目の悪い私は、それが屋根に見え「…またか…」と思いつつ近付いてみると、それは、電柱だった。あちこちから電線がぶら下がり、地面をはっている。まるでお化け屋敷のようだった。その時、はっとした。そこは焼け跡との境目だった。横のビルを見ると、黒く焼け焦げていた。誰かがどこかで言っていた。「戦後のようだ」私もそう感じた。当然、本物の原爆が落ちれば、こんなものじゃないのは分かっているが、他に表しようがない。それほど筆舌に尽くし難いものだった。ゴミ処理場のような焼け跡を見ながら歩いていると、影にはいった。上

を見上げると、真っ黒いビルが今にも私に、覆いかぶさろうとしているようだった。辺りを見ても誰もいない。私は、荒廃した星にたった一人、取り残された気持ちになった。「今、本当に一人になってしまった人…自分の家が焼けていくのを、ただ見ているしかなかった人達は、どんなに辛いだろう…」そう感じた途端に胸が苦しくなり、のどが詰まった。目の前がぼやけて歪んでくる。ふと人の気配を感じ、慌てて目をこすった。その人は大きな荷物を背負って、自転車で走り抜けていった。

家に帰り着いた私は、自己嫌悪に陥っていた。「私はただ珍しいものが見たかっただけなのかもしれない…人の気持ちも分からずに…」そんな言葉が、頭の中を行ったり来たり。被災地を訪れる前に、もっと状況をよく調べ、把握していれば、こんなに悩まずにすんだかもしれない。私の行動は、軽卒すぎた…。

今回の地震で経験したことを文にしてみても分かったことがある。「大事なのは、何でも気の持ちようだ」ということ。「社会勉強」というような気持ちで出掛けた私が、帰って来るころには「自己嫌悪」になっている。これも、気の持ちようが変わったせいだ。義援金を送ったり、ボランティアに参加している人の中に、「自分のしていることは偽善なのかもしれない」と悩んでいる人がいるらしいが、それも気持ちの問題で、自分で「偽善かも…」と疑ってしまったらその時点で、本当の善であっても、偽善になってしまうと、私は思う。善だと思ったら、人がどう言おうと自分を疑わず、まっすぐ進んでいくべきだと思う。この地震によって感じたこと、学んだことを忘れず、私も私なりの善を貫くつもりだ。

1年5組 大石朝美さん

3年10組 神原千里さん

その他 被災されて亡くなられた方々、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(「阪神大震災を記録しつづける会」の作文募集に応募し、採用された本に掲載されました。)



「阪神大震災」 — 変わってしまった神戸 —

2年生 小林由美(西区)

阪神大震災が起こった日からもう40日目になる。1月17日、午前5時46分に震度7の激震という戦後最大の地震が、この神戸をおそいました。神戸は地震のあまりない所と、聞いていたし、

今まで静かでおだやかな時を過ごしてきて、こんな大きな地震に出会うとは、夢にも思いませんでした。建物全体が、ミリミリ、ミシミシとねじれるような音をたて、今にもくずれそうな感じがしました。ガシャガシャと食器やガラスが割れる音は、今でも、耳から離れません。揺れが収まっても、しばらく私は、心臓がドキドキしていました。幸いにも家族には怪我はありませんでした。

電気、水道、ガスが全部使えなくなり、その時には、電気や水やガスの有り難さが本当によく分かりました。電気がつかなかったので、暖房が使えず、寒くて仕方ありませんでした。水は、置き水を少しずつ使いました。テレビで建物倒壊、大火災が報ぜられ、防火水槽の水不足で消防隊の人達のくやしい表情が写し出されました。火が出なかったら、助かった人達がたくさんいたと思います。とても残念です。私の家の周りの建物は、屋根の瓦があちこちでくずれ落ち、青いビニールシートでおおわれています。長田区に比べて比較的被害は少なかったみたいです。2月3日、板宿から長田あたりまで歩いてみました。テレビなどで見るのと全然違って、その場の臭いやあめのように曲がった鉄の柱、たくさんの瓦礫の山などの景色を目の前にした時、社会の教科書で見た戦災の写真に似た、悲惨な感じを受けました。

まだ今だに、マグニチュード6程度の余震が来ると言われています。たくさんの尊い命を一瞬にしてうばった大地震。本校でも不幸な出来事がありました。とても悲しい事です。人々の姿も、スニーカーとリュックで、何か以前と違って暗く彩られています。町の中は緊張感の連続のような気がします。あの数秒間で、神戸が変わってしまったのです。一日も早く、今までの明るい神戸に戻ってほしいと思います。



阪神大震災「友の死」

2年生 小南道子(加古川市)

1月17日、地震であるということには、すぐに気がつきました。少しの間、机の本や、本棚の上にあるアルバムが落ちてくるので動くことができませんでした。それから、停電していてくわしいことがわからないまま『あんなにすごい地震は始めてだったけれど、たいしたことはないだろう』と思っていました。それから、電気が通ってテレビを見て神戸がすごいことになっているのを知りました。今まで、大丈夫と思っていたのが急に不安になりました。その日の夕方に電話のベルがな

りました。電話にでるとクラスの友達でした。涙がでるくらいのうれしさと安心感がこみあげました。

1月18日、近くの家からの電話で朝早くに目を覚ました私は、テレビを見ていました。たまたま、家族が見ていたチャンネルを見ていたら、見覚えのある名前がありました。「大石朝美(16)」と書いていました。でも、テレビのアナウンサーは「おおいともみ」と読んだので、この人はちがう人だと思いながら友達の家で電話したり、別のチャンネルを見たりしましたが、やっぱり大石さんでした。大石さんの死を知ったときは、涙がとまりませんでした。あんなに元気で話していた子が、亡くなったということがまだ実感できないでいました。

1月27日、大石さんとお別れの会がありました。その場に行くまで、実感がわかず「行ったら、にこにこ笑っている大石さんが『こみなみ』って出てくるんちゃうん」とか友達と話してました。でも、そんな想像とは別に棺おけに入っている大石さんの姿がありました。その時、やっと大石さんは本当に亡くなってしまったという実感が押し寄せてきました。その日の帰りに、友達が言いました。「これから、大石さんの分まで生きらな」私もその通りだと思いました。

大石さん、消極的で人見知りする私に積極的に話しかけてくれてありがとう。一年五組としていられるのは、あと少しだけど、いつまでも一年五組のみんなを見守っていて下さい。大石さんを含む、この阪神大震災で亡くなった方々、安らかにねむり下さい。



阪神大震災を乗り越えて

1年生 内上 絵美子(伊丹市)

1月17日。この日、5時30分ぐらいから起きていたのは、母と姉の二人でした。私も、地震が起きるほんの数秒前に目を覚ましました。その瞬間、「ゴー。」というすごい音が響き、激しく揺れ出しました。私はタンスの上から落ちてくるものを防ごうと、一生懸命布団を探しました。

しばらくして揺れが止まると、強烈に土の臭いがしてきました。その中で私は「ポー」としていましたが、急に

「はよ、みんなの所に行きな。」

と思い、急いで外へ出ようとする、揺れで家が傾いたのか、ドアが開かなくなっていました。

「はよせな死ぬやろ。さっさと開けー！」

と、ドアに怒りながら、必死に体当たりをしました。ドアが開いたので、急いで弟を起し、部屋の外に出ました。すると、別の部屋から父と姉が出て来て、父が

「取れる服を取れるだけ取れ！」

と叫びました。そして、すぐガレージから車を出して、隣の駐車場に避難しました。しばらくして姉が、

「学校に電話してくるわ。」

と言ったので、私も一緒に電話をしに行こうとした時、二度目の地震がきました。この時、父と母が危険を感じたのか、母方の祖父母の家に避難することになりました。それで、みんなで家の中に毛布を取りに入りました。その時、私は自分の部屋を見てとても驚きました。

「よー生きとったわ。」

が、率直な感想です。私の部屋の中は、いろんな物で埋め尽くされていて、足を置くスペースもないほどでした。ショックのあまり部屋の前でぼう然としていると、

「することないんやったら、外で待とき。」

と言われたので、祖母と二人、外で待っていました。祖母と話していると、祖母は何度も同じことばかり言ってきました。おかしいと思って母に聞いてみると、

「ショックで一時的にボケてしまってるんや。」

と言っていました。その時私は、『人間て本当に弱い生き物だなあ』と思いました。そして、毛布を家から出し終えて車に積み、母方の祖父母の家へと避難しました。

この地震が起きて感じたことは、自然をバカにしてはいけない、人間は弱い生き物だ、人間は絶対に一人では生きていけないということです。



その時私が考えたこと

1年生 月岡摩耶（西宮市）

阪神大震災、あれから約五か月が過ぎて、人間の命の尊さと、自然の大きさ、恐ろしさを初めて身を持って知りました。

今までテレビや学校の授業などで、自然の大きさ、恐ろしさ、美しさ、そして人間の命の尊さやもろさなど、いろいろ学習してきたけれど、「そんなことは、めったに起こらないから大丈夫」と、

心の中で思っていました。だから、予想もつかない、あまりにも急なあの地震が来た時には、何が何だかわからず、すっごく怖かったです。そして、友達や知り合いの人達と連絡がつかなかった時の心細さ、連絡がついたと思ったら亡くなっていた時の悔しさは、誰にもぶつけようがなくて悲しかったです。クラスの友達も一人亡くなっていて、とても悲しかったです。

ああ、あの1月17日という日がなかったら、あの地震がなかったら、今まで通りにあの何百人、何千人という人が、死なずにすんだのに、また、悲しまずにすんだのにと考えると、すっごく悔しいです。今までこんな命にかかわるような体験なんてしたことがないから、それも地震なんてめったに起こらなかった所だったから、余計に私も含めてみんなが、自然の大きさ、怖ろしさに鈍感だったんじゃないかなと思います。「いつ、どこで、何がある」なんてわからないから仕方がないけど、あの地震があってから、「いつ、どこで、何があっても大丈夫という体勢を自分でとっておこう」と思うようになりました。自分の命は自分で守る。これは、いつでもどこにいてもものこと、勉強の時、片付けの時でも、自分のことは自分でする。いざとなつては何もできない。そんなことではだめだと思う。人は助けてくれない。自分で頑張らないと。「自分のことは自分でする」今までもそう思っていたけれど、地震があってから、より強くそう思うようになったと思います。

あの地震があってから、「やっぱり人は一人では生きていけない」とも思いました。「自分のことは自分でする」というのは、大切なことだと思うけれど、自分一人では、できないこともあると思いました。地震の時には、みんなが助け合っていました。ボランティアとして活動もしていました。その時、人と人との助け合いの大切さも知りました。あの大きな自然現象、誰が悪いわけでもありません。悲しい気持ちはまだたくさん残っているけれど、それを乗り越えてここまで来た私達だから、これからもみんなが助け合って、元のすばらしい町を取り戻して行きたいと思います。



大地震を体験して

1年生 西田美香(東灘区)

1月17日に起った大地震。この前日は三連休の最後の日で、翌日の学校が楽しみだった。けれど、次の日の朝早く、思いもよらなかった地震が神戸を襲ってきた。最初は誰かに揺さぶられているのかと思ったが、目が覚めた時には、とても激しい揺れに変わっていた。必死の思いで布団にもぐったが、怖くて震えが止まらなかった。家の中はめちゃくちゃになり、長い間住んでいた家がなくなっ

た。外から変わり果てた自分の家を見た時、涙が出た。

「これから一体どうすればいいんだろう…。」

と思いながら小学校へ避難した。この日から私たち家族の約四か月の避難生活が始まった。

初めは寒くてあまり寝ることができなかった。でも一か月ぐらいたってからは、だいぶ落ち着いて生活ができるようになった。でも体の方は、調子が悪くなっていた。はっきり言って、この生活は本当にイヤだった。今はもう家も借りて、家族みんなで暮らしているけれど、あの時の生活から私は水を大切にしようと思った。水が出ないトイレは本当に辛かったし、飲み物も初めの一週間ぐらいは飲むことができなかった。水がないと、どれほど不便なのかということが分かった。避難生活をしていた間には、いろんな人と親しくなれた。みんな私たちに優しくしてくれて、三か月ぐらいたった頃には、辛くなくなったし、楽しい日もあった。

自分の通っていた中学校が再開したのは2月1日からだった。私の学年の同級生はみんな無事だったけれど、1年生二人が亡くなった。とても悲しかった。私の家族は全員無事だったが、何より心の支えになった。この地震で家族の絆がすごく強くなったし、体調を崩し寝こんでしまった日が二、三日続いた時は、母が仕事を休んでまで看病してくれた。

五月に入ってすぐ私たちは引越した。その日、避難所で一緒に暮らした人達が、荷物を運ぶのを手伝ってくれた。そして見送ってくれた時、少し寂しかった。とても良くしてくれたおばさんが、「がんばりよ。」

と言ってくれた時、思わず涙が出た。長い避難生活も今は思い出として、これからも忘れないと思う。そしてこれからは一日一日を大切にしていきたい。



人のために何かできる人に！

1年生 深島 めぐみ (灘区)

1月17日火曜日、午前5時46分、地震は起きた。その時私は、布団の中において揺れが収まるのをまった。後で親に聞くと、初めに「ドーン」という音がし、その後はただコップや茶わん、ガラス類が割れる音ばかりだったそうだ。私の場合、初めに頭に何か重い物がのってきて、上からは蛍光灯が落ちてきた。隣に寝ていた姉が気になったので、声を掛けてみると、返事がしたので少し安心した。姉の方には、パソコン、CDデッキ、本などが置いてあって、それら全部が落ちてきたみた

いだった。自分の体の上にある物を全部のけて、まず家から出ようとする、またあの揺れが二、三回きて、少しの間身動きがとれなかった。やっと揺れが収まり、外に出ようとしても、真っ暗で何も見えず、必死に懐中電灯を捜した。そんなことをしている間にだんだんと体が震えてきた。やっとのことで懐中電灯が見つかり、すぐに外に出た。外に出て家のまわりを見ると、ほとんどの家が崩れていた。それを見た時はびっくりした。家の前で立っていると危ないということで、近くの小学校へ行った。その日から避難生活が始まった。

避難生活一日目、その日私は、姉と開店しているスーパーを捜したが、どこも開いていなかったのであきらめて避難所へ帰った。そんな日が何日か続いた。そんな日が続くにつれて、やっぱり神経的に疲れてきて、時にはどこかで野宿したいと思うようになった。そんな中、ちょっとした都合で他の小学校の避難所に移れることになった。そこへ移って私がまず驚いたのは、どの人もとても親切で、何をしてもみんなで頑張ろうというのがあったことだ。私が前にいた学校では、ほとんどの人が自分勝手に、何をしても他の人に任せていたところがたくさんあった。そんな時、いつも私は人のために何かできるような人になりたいと思った。避難所になっている学校にいるとボランティアの人数が足りなくて、手伝ってくれる人という募集があった。私はそれに参加した。“ボランティア”と言えば難しいものばかり思っていたが、やってみるととても楽しくて、すぐやりがいがあった。避難生活もだんだんと落ち着いて、楽しい日々が続いた。

今回の地震を振り返った時、一番私が嬉しかったのは、家族全員が生きてくれたこと。そして避難所の人達が家族みたいに優しくしてくれたことだ。これからは、自分からどんどん人のために何かできる人になっていきたいと思う。



怖い、ただ怖い大地震

1年生 福島美穂（中央区）

1月17日、5時46分。いきなりすごい音と共に家が左右、上下に揺れた。足場を探し、はだしのまま外へ飛び出した。外にはたくさんの人々が飛び出していた。余震のずっと続く中、心の中はドキドキしていた。なかなか寝つけなくて、やっと眠れたと思った時に、「ドーン」という大きな音。何が起きたのか分からないままだった。ラジオで震度七と聞いたときは驚いた。少し落ち着き家の中へ入ってみると、もうそこは昨日とは全く違う世界。たんすが倒れ、本棚の本は全部落ちている。

水槽もひっくり返り水びたし、あの大きな冷蔵庫さえも前へ飛び出していた。真っ暗な中、手さぐりでローソクを見つけて火をつけた。火がついた瞬間、「ホッ」として少し気が抜けた。友達が心配して家に来てくれた時は、本当に嬉しかった。そんな中、突然電話のベルが鳴って、

「〇〇の家が焼けているかもしれない。」

と聞いて、少し明るくなった外へ出て見た。そこには信じられない光景が広がっていた。私の家の前の道路一つ挟んだ南側は、まるで映画の中の出来事のようなようだった。大げさなようだが本当にそう思った。家が燃えている。けれど消防車は来ていない。それを何もできずにただ見ている人々。その光景にしばらく釘づけになった。友達のことを思い出して、友達の家へと走った。走り続けている頭の中に、考えたくないことが浮かんできた。運よく友達は無事だった。嬉しかった。けれど家は焼けてしまった。思い出がたくさんありすぎるあの家が焼けてしまい、言葉にできないほどショックだった。友達とてんととを歩いていると、いろんな人達に遭えた。お互いに無事を喜び合ったが、そんな中、その喜びを吹き飛ばすことを知った。同級生のお母さんの死。聞いた瞬間、かわいそうとか、そんな感情は出てこなかった。ただ「嫌だ!」と思った。何に対してか分からないけれど、すごく腹が立った。涙がこぼれ落ちた。家は焼けているのに消防車は来ない。けれど新聞社やテレビ局のヘリコプターは飛んでいた。

「写真を撮る前に助ける。」

と思った。この日から十日ぐらい学校で避難生活を送った。怖くて、ただ怖くて、寝てなんかいられなかったし、電気さえ消すことができなかった。それから二週間は、田舎の祖母のところに行った。ここでやっと食事もとれるようになり、落ち着けるようになった。けれど少しの揺れや、小さい音などには敏感になった。

たくさんの方が亡くなった今回の地震も、誰にも文句を言えないまま終わって行く。本当なら作文もできるだけ書きたくなかった。五カ月たった今でも、避難生活をしている人はたくさんいる。まだまだこれからも余震は続く…。



震災から今日まで

1年生 橋本真季子(北区)

1月17日の阪神大震災から五カ月が過ぎた。五カ月、長いようでとても短かった。

この震災で交通面などいろんなことが変わった。私の中でもいろいろ変化があった。非常時用の道具などを用意するようになった。生活面では、一日を大切にしようと心掛けている。こんなこと震災前の私では考えたことがなかった。自然の力は恐ろしく、いつ死ぬか分からない。いつどんな災害が起こるのか分からない。そう考えたら何もない一日が、とても大切に思える。阪神大震災、悪い所をとればいくらでも出てくるけれど、一番大切なのは、生きている人々が考えないといけないのは、これからどう生きていくか…だと思ふ。神戸が元に戻るためにはどうすればいいのか。避難所の人々はどうすればいいのか。考えないといけないことは山のようにある。考えないといけないと思っている人は何人いるのだろうか。五カ月も過ぎたから、もう忘れた人は何人いるのだろうか。考えてほしい。五カ月も過ぎ、忘れてしまう人は多くなって行くと思うけれど。そんな人々が、これから良い方向に行くように考えてほしい。神戸だけではなく、兵庫県だけでなく、日本の人々全員が、阪神大震災をずっと忘れずに覚えているような町に住みたい。少しでも死ぬ人が少ないように…。少しでも泣く人が少ないように…。

この前、友達の家に行った。その子は東灘に住んでいるのだけれど、行くまでにいろんな風景を見た。五カ月も過ぎたというのに東灘は焼け野原で、おじいちゃんからよく聞く戦争の話を思い出した。まるで私が想像する戦後すぐのようだった。元に戻る音はあちらこちらで聞こえているけれど、やっぱり焼け野原の状態に変わりはない。いろんな場所にいろんな人間が、たくさんたくさん歩いているのに、笑っているのに、町は大きな声で泣いているように思った。たくさん町の町が泣いているけれど、長田区、東灘区などは、私の見ただ中で特にすごかった。声がでなかった。

五カ月も過ぎるのに…そればかり頭の中にある。これからの未来、少しでも死ぬ人や泣く人が少ないように、一人一人が考えないといけないと思ふ。



兵庫県南部地震に遭遇して

1年生 田中清美(北区)

あの地震の怖さは、今も頭の中に残っています。

1月17日の朝5時46分ごろ、地震の初期微動がきた時に、私は目を覚ましました。そして大きな主要動が続いてきた時、隣で寝ていた母にしがみつきました。そして大きな揺れが止まった時、母は奥の部屋で寝ていた父を呼びました。「こっちに集まれ。」という父の声が聞こえ、家族六人が

集まりました。食器はほとんど割れ、熱帯魚の水も漏れ、家の中はぐちゃぐちゃでした。そして、その時は私を入れて姉妹四人は、風邪をひき高い熱を出していました。しかし、地震の怖さのあまり自分が熱を出していることなど忘れ、必死になって弟と妹に着せる布団を探していました。地震のため、電気やガス、水も止まり、暗闇の中、ラジオを探し、今の状況を聞きました。神戸の震度は6でとても大きいものでした。ラジオを聞いている時も、余震があり、悲鳴を上げていました。ただ陽が昇るのを待つだけでした。

陽が昇り、父は「一度仕事場に行ってみる」と言い、家を出ました。それから一時間ぐらい達ち、父はびっくりした顔で帰ってきました。父の仕事場は三宮にあり、その近くの住宅は倒れ、商店ではガス漏れがあり、地震の怖さを知ったと私達に話しました。そして、テレビが写るようになり、始めて神戸の姿を自分の目で見た時、父が話してくれたことがそのまま写っていました。もっとびっくりしたのは、私が入学を希望している「神戸女子商業高校」が燃えているように見えたことでした。もし、学校がなくなってしまうたら、私はどうなるんだろう。とても不安でした。けれど、私は心配し、不安になることができるだけ幸せだと思います。地震で亡くなった人達の中には、私と同じ「神戸女子商業高校」を希望していた人もいたと思います。しかし、そんな願いもかなわず、亡くなってしまったのですから。だから、その時もし「神戸女子商業高校」に入学できたら、その人達の分も頑張ろうと思いました。

そんなことを思いながら、私は母の手伝いを始めました。水が止まっているため、近くの小学校に給水車が来ているというので、母と私で水をもらいに行きました。その時もまだ熱があったのですが、自分でも何かがしたくて、母に付いて行きました。小学校の周りには行列ができていました。三時間ぐらい並び、ようやく水をもらうことができました。普段、何も思わず水を使っている私だけけれど、水をもらった時、初めて水の大切さを知りました。その時はもう電気とガスは通っていたのですが、地震のため冷蔵庫が壊れてしまい、中の生物も全部腐ってしまいました。近所の人に買ってきたものを入れてもらい、助けてもらっている間に、兄はバイクで須磨の方へドライアイスを買に行ってくれました。そして、お昼ごろ、今度は私と妹で水を汲みに行きました。いつもならすぐに飽きて嫌がる妹も、今どんな状況なのかわかっているようで、何も言わず私と並んでくれました。そして、二日目の夜も私と母で並んでいましたが、父が手伝いに来てくれました。その時私は、「家族で力を合わせれば、何でもできる」と思いました。

この震災で感じた地震の怖さやその中で学んだ自然の大切さ、家族の力は、これからの私の人生にきっと役立つと思います。この経験を生かして、今後の高校生活を頑張っていこうと思っています。



忘れられない出来事

1年生 藤岡 賞子 (長田区)

1月17日午前5時46分。この日の出来事を私は一生忘れないと思う。大きな音とともに強い揺れが始まった。目を開けると部屋の中は真っ暗で怖くなり、急いで布団をかぶった。するとまた強い揺れがきて、私の上に何かのものが落ちて来た。机とタンスの下敷きになっていた。父が助けに来てくれて、二階から下へ降りると、みんながいて安心した。玄関のドアは家がゆがんだためか開かなくて窓から出た。出た時に私はびっくりした。前の家はつぶれていて、両隣の家も二階がつぶれていた。空を見ると、南の空が赤く光っていた。それはまるで戦争の時のようだった。公園に行くときたくさんの人がいた。公園にいる時に私は思った。「友達はみんな大丈夫かな、学校は、先生は……。」とても心配だった。

次の朝、家を見に行くと、いつも通る商店街が焼け野原になっていた。その商店街だけで80人ほど死んだということを聞いた時はびっくりした。仲の良かった友達も4人犠牲になった。すごく悲しかった。毎晩泣いた。でも犠牲になった友達の分もがんばろうと思った。

この地震で私は家をなくしてしまった。だから近くの中学校へ避難していた。最初の一か月くらいは余震も怖かったし、毎晩不安で眠れなかった。しかも6人で二畳という狭い所で過ごした。でも二か月もたつと、余震も少なくなり不安も消え、避難所で友達もたくさんできた。だから、避難生活もけっこう楽しいなあと思っていた。ボランティアもいろんな人が来てくれた。炊き出しに来てくれた人や、マッサージに来てくれた人、カットをしてくれた人、食器をくれた人、いろんな人が来てくれた。その人たちに心から感謝しています。救援物資も、お菓子やジュース、ラーメンなど、大好きな物がいくらでももらえたので、私は一生避難していたと思った時もあった。その反面、やっぱり不便なこともあった。水が出ないし、ガスも出ない。だからもちろんお風呂にも入れない。そういう時もあった。でも避難生活を終えた今、それはいい思い出となっているし、貴重な体験をしたんだなと思っている。避難生活を通して助け合いの大切さを身を持って知った。

もう一つ心配なことがありました。それは受験です。こんな時に中三だなんてついていない。もう一年早かったら…。でも私立の入試はテストがなくなったと聞いてすごくほっとした。でも私には公立の入試が残っていた。そのために問題を解こうとしても、全然解けなかった。当日ももちろんだめでした。地震さえなかったら…。その言葉は何度も何度も心の中で思っていたことでした。もちろん今も思っています。でも地震があったから、いろんな人に出会えた。今はそう思うようにしています。

阪神大震災で神戸の町が一瞬にして変わってしまった。この出来事を私は一生忘れてはいけないと思う。



震災から約150日経って思うこと

1年生 津田 めぐみ (須磨区)

1月17日の震災。余震に脅えながらの不安な生活から、もう150日がたちました。

あそこ、受験のピークに焦っていた中学三年だった私達も無事卒業し、今の高校生活を送っています。四月、入学する前から新長田の校舎のことを心配していましたが、やはり仮設の校舎となりました。最初は、「仮設校舎は駅から遠いし、坂もしんどいからいやなあ。」と、思っていました。でも、その頃まだ、学校が潰れ、家までもが潰れてしまっていて、九州や北海道の方までにも行ってしまふ神戸の小、中、高校生を見ていると、「そんなこと思ってもらえない。まだ自分の通う学校があるんやからいいんや。」と、思いました。確かに駅からは遠いです。でも私は名谷に住んでいますので、家から40分から50分もあれば通えます。クラスの中や学校の中、その他の学校でも、JR、阪急、阪神などの電車を利用している人は、一時間や二時間もかけて通学してくる人がいます。それを思えば、たいへん恵まれた環境にいます。

名谷は、大きな建物が潰れたようなこともありませんでした。二月頃から家の近くの公園には、たくさんの仮設住宅が建ち始めました。仮設住宅が建ちかけの頃、「こんな狭い所で、何もかもを共同で大変やろなあ」と思いました。この学校も廊下や床がうるさいです。でも、どんなに使いにくいものでも、大切にしていかななくてはいけないと思います。

震災から150日。今は、何もなかったかのように私達は過ごしています。でも、何か大切なことを忘れてるように思います。まだまだ仮設住宅の入居が決まっていない人もいます。家がなくなって、これからまた建て直そうとしている人もたくさんいるのです。毎日学校へ通えている私達は、本当に恵まれています。その中で、ただ毎日を過ごしているだけではないでしょうか。何かできることはないのでしょうか。この150日間を振り返ってみて思いました。

この大震災で得たものがたくさんあります。「人と人との助け合い。」「思いやりの心を持つこと。」「何事にもあきらめずに、一生懸命になること。」まだ、たくさんあります。この震災は、まだまだ終わってはいません。震災を通して得たものを今だけで止めずに、これから先の将来に役

立たせていきたい、たくさんの人の悲しみの気持ちも忘れないようにしたいと思います。



大震災を乗り越えて

1年生 北原 ゆかり (明石市)

午前5時46分、正に「悪夢」が起こった。

「ガタガタガタ」寝ていたベッドが踊り出すように揺れた。ラジオを聞くと、震源地が淡路島北部と言った。私の家の前には海があり、ちょうど淡路島と向かい合っている。しかも震源地は、直線上なのでとてもびっくりした。そして、少し落ち着いた頃、外に出てみると、時代は過去にタイムスリップしているようだった。私の目の前にある風景は、戦後のような感じだった。この関西地方に、こんなにも大きな地震がくるとは、本当に信じられなかった。私の頭の中では「地震」と言えば、「関東」というイメージが強かったためだと思う。そして、何よりもこの地震は、命の大切さを教えてくれたように思う。

父は、いつも通りに家を出て会社に行った。父は市役所で働いているので、とても大変そうでした。いつもなら、暇そうにしているのに、この時だけはとても忙しかったようです。明石市でも、かなりの被害があったそうで、こういう大変な時にも役所へ行かなければならないということは、とても大変なことで、この時だけは、改めて父のことを見直しました。

そして何よりも、自分の進路のことがとても心配でした。神戸女子商業高校はものすごい被害にあっているようで、本当にドキドキの毎日を送っていました。けれど、進路は何とか自分の希望がなかったので良かったです。今年初めての春が来たようで、本当に嬉しかったです。

私達は、いつも何げなく時を過ごしているのがとてもよく分かりました。幸いなことに私の家では、びっくりするほど被害が少なかった。電気はわりと早くつきました。でもガスがなかなかだったので、とても大変な生活でした。特にお風呂は大変でした。知っている人などの家で、お風呂を貸してもらいました。

私はつい最近、サハリンで起こった大地震を見ていられませんでした。見ている時間があるのなら、サハリンに住んでいる人を助けたい、そう思いました。これからは、どんな時にも対応できるように、気をひきしめて毎日を大切に生きていきたいです。この地震で何よりも命の大切さ、人のつながりの強さを知りました。